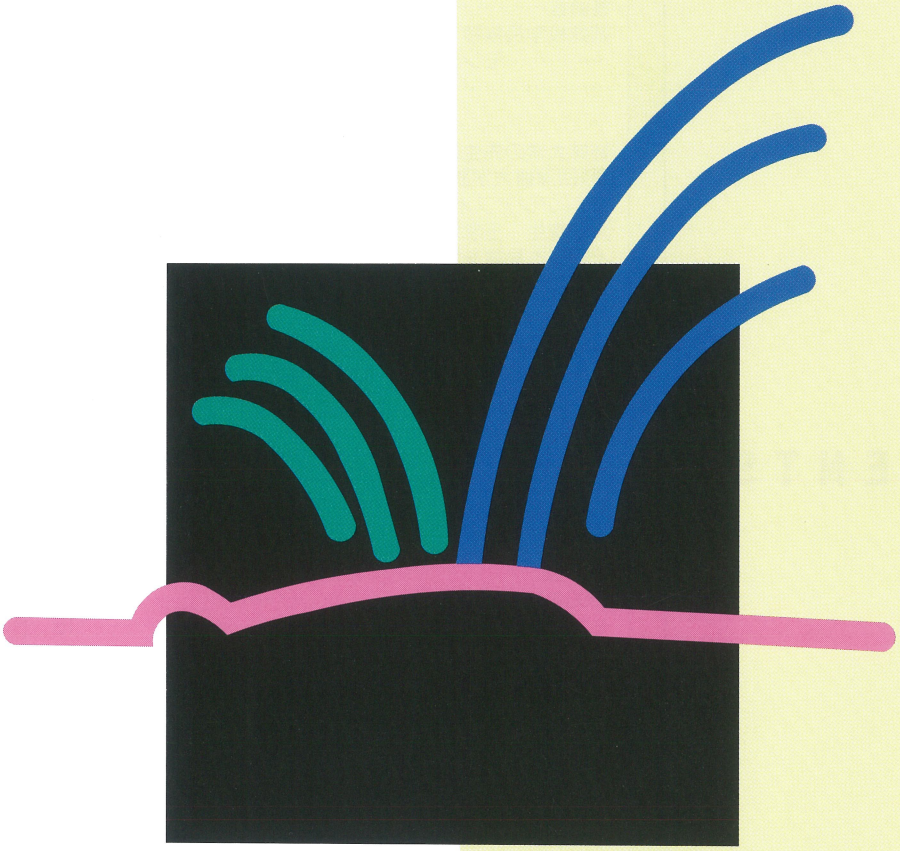
国際交流レター

vol. 18



INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

熊本学園大学国際交流委員会

'96.7.31

CONTENTS

国際交流レターVol.18
CONTENTS

巻頭言……学長　岩野茂道 3
姉妹校学長挨拶
……モンタナ州立大学学長　マイケル・マローン 4
……大田大学校総長　呉應準 5

トピックス
姉妹大学の先生によるコンサート開催…… 6
第1回深圳大学訪問学生研修団派遣…… 6
'95「アジアフォーラムin熊本」学生討論会開催される… 6
大学院生　王念海さん日本語弁論大会でYMCA賞（優勝）
と福岡市長賞を獲得！…… 8
第1回大田大学校夏期学生研修団受入れ…… 8

教員交流
日本人留学生の健康と生活から……新立義文 9
Roche Family in Kumamoto 1994-1995……ﾘﾁｬｰﾄﾞ・ﾛｯｼｭ 10
モンタナ物語……堀正広 11
銀杏の意味……王洋 12
韓国' 95キーワード……木下徹弘 12
また来てみたい熊本……尹一鉉 13
交換教員往来…… 14

学生交流
研修団
1995年研修団往来…… 15
モンタナ研修団来学…… 15
第1回大田大学校夏期学生研修団来学…… 17
第5回大田大学校（姉妹校）訪問を終えて……宮崎俊策 20
第1回深圳大学訪問学生研修団の深圳訪問……西紀昭 21
1995年度経済学部「外国事情研修」を終えて 岡本憲也 22
「海外研修」に飛躍・雄飛の夢を託して…… 山田知良 23
交換留学（派遣）
アメリカへ……宗野泰之 24
イギリスへ……佐藤誠二 24
フランスへ……松岡高弘 25
ドイツへ……鬼丸敦 27
中国へ……角居典枝 27
韓国へ……渡邊潤 27
交換留学（受入）
アメリカより……パトリック・キーン 28
ドイツより……シモーネ・トムセン
シュテファン・トライアー
クレメンス・ジーグファンツ
グレゴア・シュマルツ 29
イギリスより……ケリー・ウェアリング 29
中国より……刘華端 30
韓国より……李銀娥 31
行事
人間交流としての国際化……吉永心一 32
着実に交流が深まっている「スポーツ交流会」…… 32
調査
第1回国際交流に関するアンケート調査実施…… 33
第1回留学生生活実態調査実施…… 34

DATA
1995年度出身国（地域）別外国人留学生数…… 35
1995年度留学生名簿…… 35
本学留学生への交流の主な案内…… 36
1995年度本学留学生の奨学金受給実績…… 36
Seminars…… 37
国際交流委員会メンバー…… 37
国際交流センター事務室スタッフ…… 37
1995年国際交流EVENTS…… 38

巻頭言

東アジアとの交流姿勢を反省する

作家・司馬遼太郎氏が亡くなられた。多くの日本人に慕われてやまない人であった。戦争に敗れ、心身の喪失感から進むべき道に惑う人々に、日本の歴史に隠された数々の岐路を教え、自らを根底から考える方法を示唆し、新しい日本人のありかたに勇気と希望を与えてきた偉大な思想家でもあった。東アジア、とりわけ中国と韓国に対する氏の姿勢も立派であった。一兵卒として中国に赴いた経験の重みが、氏の東アジア観をより的確なものとしたのかも知れない。中国・韓国の歴史を熟知したもののみが取りうる両国民衆への深い理解と愛情が、作品の隅々にちりばめられていた。司馬遼太郎氏が、多くの中国や韓国の知識人からも敬愛されてきた理由でもある。

にもかかわらず、この両国と日本の関係は、このところ改善されるどころか見方によっては一層険悪になってきたかのような感じさえ否めない。その理由は、われわれ日本人の意識に、ほとんど改革の痕跡が顕著に見られないことを、中国と韓国の人々から見透かされているからではないかと思われる節がある。他人ごとではない、私自身からしてそうである。私のような、戦前の皇国史観を叩き込まれた昭和一桁の世代は、よほど日韓関係の歴史を詳細に学ばないかぎり、意識の底に滞留している旧占領地国民に対する故もない優越感を拭い去ることは容易ではない。その世代から教えられてきた、現代の青年は過去の日本の行為に対して責任を感じる度合いが薄い分、ナイーブでありえても、目を背けたくなるような苛酷な加害者としての歴史事実を知らないだけ、親の世代よりもさらに隣国との対話が疎遠になりがちとなるからであろう。東アジアの諸国をこよなく愛した司馬遼太郎にしても、それ以上踏み込めなかったどろどろした現実の情念の世界がそこには横たわっているのである。それは、われわれ残された世代に託された、自らに刺さす厳しい試練の日々を待つ以外にない。いずれにしても、真実の過去を知る努力が厳しく求められている。

熊本学園大学学長
岩野茂道

アメリカ、イギリス、フランスそしてドイツの欧米諸国との交流も、新しい段階を迎えている。経験の広がりは、学生諸君に例えようもなく大きな自信を与えてきた。このような体験学習の積み重ねこそが、本学の学生諸君をして、いち早く阪神大震災への組織的なボランティア活動に取り組ませたし、さらにはNGOに入ってカンボジア・極東ロシア・ボスニアで国際ボランティア活動に参加した矢島秀章君のような国際貢献のできる卒業生を送りだせるようになった背景の一つでもあると信じている。

学問は机の上だけではものにならない。とりわけ心身ともに逞しく柔軟な二十歳代に未知の世界に挑戦する学習効果は決定的である。世界はますます狭くなり、地球は誰のものでもなく、まさに人類の共有財産であるとの認識が日々強まってきている。理屈を抜きにして、もっともっと多くの学生が多様な海外経験を積まねばならない。日本の外側から自らを見つめ直さねばならない。小さい世界に安住すれば、小さい世界観しか獲得できない。人間の成長には限界はない。どこまでもどこまでも挑戦して、春秋に富む諸君の大輪を育て花開かせて欲しいものである。

Office of the President
211 Montana Hall
MSU • Bozeman
Bozeman, MT 59717-0242
Telephone (406) 994-2341
Fax (406) 994-1893

I am especially moved and honored to be asked to write a special letter for inclusion in Kumamoto Gakuen University's International Exchange Letter. This is so for several reasons.

Montana State University is the oldest of your university's several sister institutions and our relationship is one that has not only stood the test of time but has in fact grown and flowered with time. You honored me especially several years ago by asking me to speak on behalf of all of your sister universities on the great occasion of your fiftieth anniversary celebration. That was wonderful. My fondness for your university and for Japan itself is also due, of course, to the fact that my son lives in Japan, just outside Utsunomiya in Tochigi-Ken, with his wife Eriko and their infant son. One of my particular pleasures in visiting them comes from the opportunity to visit the great national shrine at Nikko, a most remarkable place.

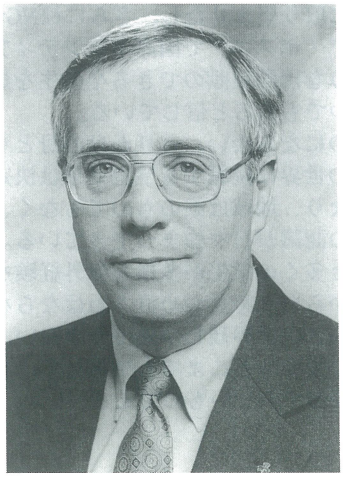
Many "sister university" relationships are, frankly speaking, only symbolic gestures, in which two institutions merely exchange visits and nice mailings of literature. Our relationship has proven to be one of those that, instead, is truly substantive and meaningful. It has been my pleasure, both during my visits to your campus and upon many occasions here in Bozeman, to get to know your leaders, faculty and students, to see the dozens of students who have benefitted from our exchanges, and to talk with both your faculty and ours about the benefits they derive from living and learning in each others' communities and campuses. In other words, ours has been a relationship that really "works."

I truly believe that what we are about here is much more important than the cultural enrichment of our individual faculty and students, significant as that is. What we are seeking and achieving is the building of understanding and of closer bonds between two of the world's great nations, two nations already bound together by trade and commerce and now increasingly bound also by ties of culture and friendship. Take, for example, this one instance: Montana is one of America's six great wheat-producing states, and 70 percent of that wheat is sold in eastern Asia. Thus, it is only natural and good that Montana should get to know its great Japanese trading partner better. And we have.

So, please accept our good wishes from Montana State University here in Bozeman. Our relationship with you is one that we value and, indeed, treasure.

Sincerely,

Michael Malone, President
Montana State University



〈 要約 〉

モンタナ州立大学は貴学の姉妹大学の中でも姉妹校関係が最も古く、この関係は幾星霜を経て、成長し、花開いてまいりました。数年前、貴学の盛大な50周年記念式典において貴学の姉妹大学を代表して挨拶させていただいたことは、非常に名誉に思っております。大変ありがたいことでした。

率直に申しますと、一般的には姉妹校関係と言っても単なる掛け声にすぎず、表敬訪問や出版物の交換の域をでないものが大半です。しかし、本学と貴学との姉妹校関係は実質的なもので、意義のあるものとなっています。熊本やボーズマンのキャンパスで、理事長・学長はじめ教職員の方々、そして学生諸君と知り合いになり、多くの交換留学生を見かける機会を得ました。また両大学の教職員と、それぞれの大学や社会で生活し、学ぶことの素晴らしさについて語り合えて大変うれしく思います。このように、私たちの姉妹校関係は「立派に機能している」のです。

現在私たちが行っている交流は、教員や学生の個人のレヴェルの異文化体験（もちろん、それ自体意義のあることですが）以上に重要な面があると思います。私たちはこれまで、日米2国間の相互理解と、より密接な絆を固めることに尽力してきました。両国間にはすでに通商貿易の面での関係はありましたが、今や文化と友情の強い絆もまたできました。

ここボーズマンにあるモンタナ州立大学を代表して、心からのご挨拶を申し上げます。今後とも貴学との貴重な関係を大事に育てていきたいと存じます。

マイケル・マローン　モンタナ州立大学学長

TAEJON UNIVERSITY
GRADUATE SCHOOL
Taejon, Korea 300-716
Telephone(042)273-2471, 280-2188
FAX(042)272-2382

新年明けましておめでとうございます

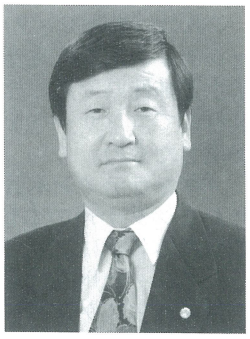
1997年の新年を迎えまして 北岡理事長先生、岩崎学長先生また教職員皆さんのご健康とご多幸ご多福をお祈り申し上げます

本年は大田大学校と熊本学園大学との姉妹関係が締結され10年が経過するようになりました。「10年ならば三昔も変化する」との諺のことわざがあります。本学の初代姉妹校の熊本学園大学とは交換教授、学生交流等が活発に行なわれておりますが、両大学はよりも堅く手を取り合ってお互いに学術研究の交流も活発に行い、高等教育の国際化へに対応する先鋒隊として働くことが出来るのを大きく期待しております。

本学の学生達または本学で学ぶ留学生が地域社会に溶け込みながら楽しい学習に取り組めるように近隣坪6650坪の大きな中央図書館が1996年3月中旬頃に開館予定です。また350名以上を収容することが出来る寄宿舎が3年前に完成され本学の学生並びに交換教授、留学生、外国研修団の利用に供しております。姉妹校の教職員、学生の皆さんには是非ご利用頂きたい願っています

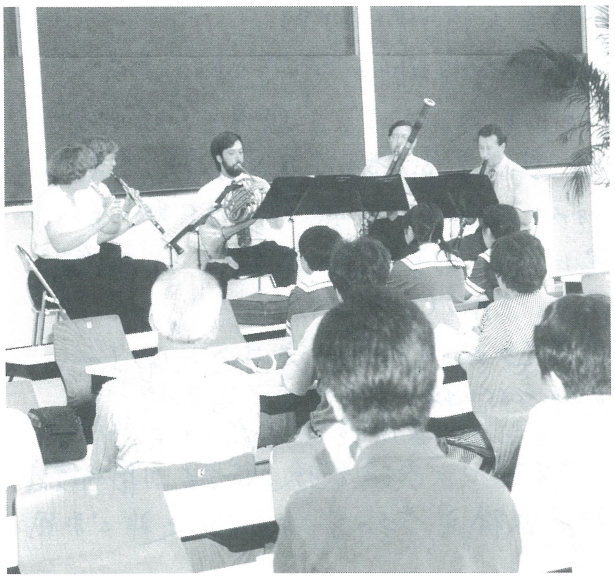
1996.1

大田大学校
総長 吳恵淳



トピックス

姉妹大学の先生による コンサート開催



1995年7月11日、本学に於て1時間ずつのミニコンサートが2回開催された。

これは、米国モンタナ州立大学の先生方から成る『ギャラティン木管五重奏団』から、姉妹大学である本学学生と姉妹県である熊本県の一般市民の方々の為に、無料にてコンサートを開きたいという申し出があって実現したもの。

『ギャラティン木管五重奏団』は、1972年に結成されたモンタナ州の木管五重奏団。同合奏団は5人の木管楽器の名手により一体化した音楽的独創性を生み出し、モンタナ州内はもとより広くアメリカ北西部にまで知られ、スタンダートな木管五重奏レパートリーの洗練された演奏と共に、多くの新しい作品や編曲の発表で有名。彼らのレパートリーの代表的なものには、バッハ、モーツァルトをはじめ、ジョージ・ガーシュウィンやスコット・ジョップリンなどの作曲家の作品がある。五重奏団の5人はすべてボーズマン交響楽団の首席奏者であり、ボーズマン市にあるモンタナ州立大学の音楽学科の教員である。

当日は、生憎の大雨という悪天候にもかかわらず、学内学外から多くの音楽愛好家の方々が集まられ、すばらしい一時を過ごし、夜の部では、モンタナクラブ会長の矢毛石先生から花束の贈呈もいただいた。また、2回のコンサートの合間には、5名の先生方にはお疲れの中、本学学生及び、付属高校の生徒たちにパートごとに分かれて実技指導もしていただいた。

その中の一人、アラン・リーチ教授（バスーン、サキソフォン奏者）は、日本の邦楽に関心を持たれ、1997年4月に再来日される予定。

第1回深圳大学訪問 学生研修団派遣

1987年に姉妹大学関係を締結して以来、交換教員・留学生の相互派遣を続けてきた深圳大学に、昨夏第1回目の学生研修団が派遣された。深圳大学では、日本語学科の学生との懇談や法学科の学生との座談会、昼食会、キャンパス案内とスポーツ交流会等が1日をかけて行われた。また、日系企業と台湾との合弁企業を参観し、深圳経済特区の経済事情の理解も深めた。

この他にも、歴史的側面からの日中関係を直視するという視点から南京市を訪れ、南京城壁修復事業のボランティア活動にも参加した。

今後も「アジアを知る」研修団制度のひとつとして、韓国大田大学校訪問学生研修団とともに毎年夏期休業期間を利用して派遣される。

'95「アジアフォーラムin熊本」学生討論会開催される。

アジア・オセアニアの12カ国・地域から招聘した44名の大学生が来日して日本について学習し、熊本の大学生と一緒になってアジアの将来について討論する「'95アジアフォーラムin熊本」が平成7年8月23日、24日の両日に熊本国際交流会館で開催され、「ひとつの社会、多様な文化」のテーマで活発に意

見交換や討論が交わされた。

このフォーラムは平成3年に財団法人日航財団が、「21世紀のアジア・オセアニアにおける国家の枠組を超えたコミュニティ―形成の可能性」の研究・提言を目的として、アジア・オセアニアのオピニオン・リーダーと同地域からのJALスカラシップ学生として来日した大学生が意見交換や討論を行うために設立されたもの。過去2回石川県で開催されていたが、平成5年に熊本県、熊本市、熊本市国際交流振興事業団が熊本へ誘致し、それを熊本留学生交流推進会議（本学を含む）が協賛して実施された。

同フォーラム開催については、アジアフォーラムin熊本実行委員会（日航財団、熊本県、熊本市、熊本市国際交流振興事業団）が組織された。学生討論会については、本学国際交流センターが実務担当の窓口になり、具体的な実施方法などをコーディネーター会議で検討した。7回にわたって開催されたコーディネーター会議では、―学生討論会が創造的な討論会になるように、また熊本の学生が海外からの招聘学生と自由に討論できるように部会を4つに分ける。各部会ごとにテーマを設定し、コーディネーターの司会で討論した後、全体会で各部会の報告を行う。言葉は英語の逐次通訳で行う。事前学習も数回行う。東京で事前研修を受講している海外招聘学生に熊本の準備状況を伝える。―などを決め、参加学生の募集が開始された。募集を開始した時は学生の反応がやや鈍く、各部会とも予定された10名が集まるかどうか心配されたが、だんだんと学生の関心も高まり、熊本大学、熊本県立大学、九州女学院短期大学、熊本学園大学から学生が参加し、予定を上回った。

このようにして、4つの部会のテーマとコーディネーターの先生方、並びに参加学生は次のとおり確定した。

① ふりかえるアジアの過去と未来（蘭信三先生：熊本大学文学部助教授）
参加学生は22名

② 共に働くために（黄在南先生：熊本県立大学総合管理学部学部専任講師）
参加学生は18名

③ メディア文化と生活変容（小林直毅先生：熊本学園大学助教授）
参加学生は11名

④ 教育と多様な文化（カーク・マスデン先生：熊本学園大学経済学部講師）参加学生は16名

8月23日には基調講演やシンポジウムが行われ、アジアが抱えている問題とその中での日本の役割について論議が交わされた。

8月24日の学生討論会では、海外からの招聘学生の意見にやや圧倒されることもあったが、熊本の学生は、事前研修の成果を発揮して、積極的に質問や意見を発表した。参加した学生は「アジア・オセアニア地域の学生と初めて直かに言葉を交わしましたが、彼らが日本について強く関心を持っていることが分かった。もっと意思疎通を図るため語学力とアジア・オセアニア地域のことについて深く知りたいと思った。非常に良い刺激を受け、貴重な経験となった。」と感想を述べた。こうして8月23日、24日の両日に行われた'95アジアフォーラムin熊本は実りある成果を上げ、無事終了した。

トピックス

最後に、'95アジアフォーラムin熊本に参加した学生が今後も語学力の向上とアジア・オセアニア地域について深い関心を持ち、継続して学習され、相互理解の増進と親善友好のため貢献されることを期待いたします。

大学院生王念海さん日本語弁論大会でYMCA賞(優勝)と福岡市長賞を獲得！

大学院経営学研究科2年の留学生王念海さんが、9月30日、財団法人福岡YMCAと福岡国際交流会主催による「第13回九州在住外国人による日本語弁論大会」において、12名の出場者のなかから、みごとYMCA賞（優勝）と福岡市長賞を獲得しました。演題は「誤解」。昨年も同演題で本学の弁論大会においても優勝しており、その実力は周知の通りです。
今後は、全国規模の弁論大会にも挑戦してみたいと意気込みを見せています。

第1回大田大学校夏期学生研修団受入れ

猛暑の熊本で、韓国・大田大学校からの学生研修団の皆さん29名は7月10日（月）～29日（土）の3週間にわたる日本語・日本事情の学習に汗を流した。

西合志研修所に泊り込み、毎朝電車・バスを乗り継いで大学キャンパスへ。午前中は毎日2時間の日本語授業を、午後は日本事情特講で日本経済・文化についての講義を受けた。
また、週末は阿蘇・天草への1泊旅行で交流の輪を広げた。

大田大学校日語日文学科の学生さんを中心とした研修団員が諸々の研修に熱心に取り組んだ成果として、帰国する頃には日本語会話も益々流暢になり日本の文化・社会事情にも精通し、受入れ側の実行委員を大いに喜ばせた。

この研修団員のなかから'96年大田大学校から本学への交換留学生が選抜されたのも吉報だ！

第1回大田大学校夏期学生研修団一行

日本人留学生の健康と生活から

熊本学園大学教授　新立　義文

深圳大学に交換教員として6ケ月の留学からやがて一年が経とうとしている。
私が、中国を訪れたのは、大連・瀋陽、上海、広州・桂林、香港と調査や学会、教育視察等を含め今回で4度目であった。

「人には添って見よ、馬には乗って見よ」と昔からよく云われているが、「見ると聞くとでは大違い」とはこのことであろう。

私は、旅先では型にはまることが嫌いな性分で、暇を見つけてはトコトコと出歩く方である。そのような意味からも前回までの中国もそれなりに出歩いて見たが、今回だけは例え半年とは云え住んでみて近代中国の変容を目の当たりにする事が出来、私なりに成果があったと認識している。

改革開放に伴って発展し続ける深圳市の様子については、マスコミや過去に行かれた諸先生方の報告に数多くあるので今回は触れることを避けることとした。

紙面の都合で詳細なことは書けないが、今後、深圳大学に限らず外国の大学に留学しようと考えている学生にとっての参考になればと考え、期間中の「日記」の中から感じたことの一つを述べてみたい。

今回、「留学生の健康」についての調査のきっかけは、あることに遭遇したことにある。と云うのは、ここ深圳大学潮汐桜（学内の留学生のための宿舎）に着任してから1ケ月目位から、何人かの留学生に共通してみられる身体症状ないしはストレス様症状の愁訴が診られたことにある。ことに、私の知る限りでも6人の留学生に発熱、腹痛、下痢、嘔吐等の症状がみられ、ほとんどが一日ないし二日位で回復している。それまでの生活から考えても決して悪いものを食べたとか不摂生をしたとか云うことはみられず、極めて不自然な形での発症である。しかも、これらの、疾病様症状は留学期間中の前半に多くみられる傾向があり、消化器系疾患、呼吸器系疾患が最も多いようである。これは、環境に対する、留学生達の心身の順応が追いつかないことからくるものと思われる（不適応反応）。具体的症状は、下痢や胃痛、風邪様症状といったものである。

本学からの留学生、角居典枝、佐伯玲奈さん等と(留学生寮;潮汐楼前にて)

それといま一つ考えられるのは、睡眠など、人間の生体リズム（バイオリズム）の狂いから生ずるものである。バイオリズムは毎日、毎日変化し、常に、身体のリズムと感情のリズムの、マイナス因子とプラス因子の周波によって制御され、且つまた、そのリズムは個人個人により異なっていることはよく知られていることである。

ヒトの睡眠リズムからみると、ムラがあることは決してよいことではない。今回の調査で見られたことは、一つの疾病様症状の発生要因となる可能性があり、全く無視することは出来ないことと考えている。

まず、熟睡型に対しては心配はなさそうである。心配しなければならないのは、「睡眠にむらがある者」にいろいろな疾病様（不定愁訴＝病気ではないが、病気になる前の心身の不調を訴えること）症状が起こるということである。

もともと、この睡眠には、浅いひと（長い時間の睡眠型）、深いひと（短時間に睡眠がとれる型）とあるが、十分熟睡できるからといっても限度がある。大体、ひとの睡眠はおおよそ6時間から8時間が平均と言われている。しかし、これはあくまでも平均的な数値であるのでそんなに深く考え心配する必要はないが、血圧の低いいわゆる、低血圧のひとは、朝起きることが苦手である場合が多い等もあって、授業に遅れて出席している学生も多い。或る学生などは、私の在深中全く授業に行かなかったほどである。

次に食生活の問題であるが学生には塩分多摂取型が多くみられた。これは、シングルライフを送る場合の食生活はこの点に注意をしなければならないと考える。

これら、食生活に限らず良につけ、悪しきにつけ「若いときのツケ」は30歳以降の中年になってから現われることを認識しなければならない。

私は、今回は、深圳大学に留学している学生の健康状態について、大変悲観的な面ばかりが目についたが「睡眠、栄養、運動」の健康の3原則を着実に生活の中に取り込むことは勿論であるが、いまひとつ、

メンタル・ストレスと生理的ストレスの解消がとても大切であると考える。これらには、個人差が大きく、人によって様々な反応を示すわけであるから、自己のストレス反応や愁訴反応を含む疾病様症状を早く見抜き、それに対応できる知識・態度およびそれらに対応できる能力を身につけることが必要である。

今、振り返ってみると、環境の全く異なったところでの健康・体力の維持／管理が如何に重要であるかを痛感した留学であった。しかし、反面楽しい期間でもあった。平和な日本で学生生活を送るのも良いことではあるが、機会があれば是非一度は外国から日本を眺め、また、日本人に問いかけることは自己を磨く上では必要なことではなかろうか。

Roche Family in Kumamoto 1994-1995

二人の子ども及び国際交流センタースタッフと

My family and I look back on our year in Kumamoto with fond memories and a new window of understanding and appreciation into our world. The experience even though not always easy was truly wonderful and more valuable than any textbook learning. I firmly believe that a short stay would not have given us the insight we gained. I personally have developed more of a global mind which brings a higher level of understanding among cultures and a tolerance all women and men should have. Now my family and I look at the world from a little different perspective. We came with open minds and welcomed learning the Japanese way; history, language, culture, customs, ceremonies, festivals, social dynamics, education systems, business, food, and on and on. We came back to the USA with a taste for Japanese food, and many wonderful gifts but the thousand paper cranes from the elementary school we received on the morning we departed is the most touching.

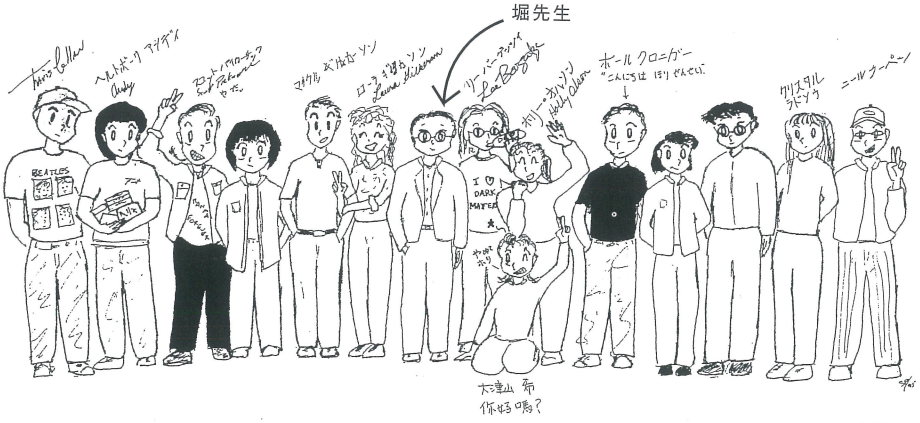
Although Amber chan (go nensei) and Bryce kun (roku nensei) did find the language a difficult barrier at first, they over came the obstacle and made incredible progress. By the end of our stay they were feeling more integrated into society and developed some friends that they still communicate with. Our family appreciated being welcomed into Takumabaru shogakoo, and the effort the administration made to make us fit in as best we could.

There were so many things in the Japanese culture we admired, some of these were so obvious to us as foreigners but maybe not to Nihon no kata. The Japanese way valued simplicity, quality, organization, safety, cleanliness, friensdhip, group improvement and an incredible work ethic. Daily I was grateful for the average citizen being able to welcome my feeble effort in Nihongo, and often reverting to eigo because my nihongo was too poor.

In my mind I can't help but compare so many things in our two cultures, but not with a right versus wrong attitude, only a different style. This captures the essence of our experience, and has made us all grow and learn more about Japan, the USA, the world and ourselves. We sincerely appreciate the great year at Kumamoto Gakuen Daigaku, Kumamoto shi, Kumamoto ken, and Kyushu. A wise man once said that if you can count your good friends on one hand you are a rich man. Well after a year in Japan my family and I are truly wealthy!

Minasan domoarigato gozaimashita. Kazoku no tanoshikatta!

Richard Roche
Montana State University
January 24, 1996



平成8年度交換留学生として来学する
スコット・バイカチャク君によるイラスト

モンタナ物語

熊本学園大学助教授　堀　正広

1994年8月1日からの1年間は、私たち5人家族にとってこれまでにない充実した1年だった。一人一人がそれぞれにモンタナ物語を胸に抱いて帰国した。

小学校5年生と4年生の子供達は、登校の初日泣いた。前夜二人は、何度も英語で自己紹介の練習をし、自信と期待で床についた。しかし、翌朝、担任の先生は、簡単に二人のことをみんなに紹介して、すぐに授業に入った。機関銃のように話される英語に、彼らの自信と期待は完全に撃破された。なんだか、“a lunch boy”のようだと彼らは自分たちのことを評した。“a lunch boy”とは、授業の時は何にも分からずぼおっとしているのに、給食の時間になると人一倍元気な子のことだそうだ。

二人とも最初の数ケ月は全く授業についていけなかった。しかし、7ケ月を過ぎた頃になると、国語以外の授業はかなり理解できるようになった。とくに、4年生の息子は、この頃には英語で寝言を言うようになり、英語教師の父は、はじめて息子に嫉妬を感じた。

幼稚園児の末娘は、登園第一日目から何の問題もなく、アメリカの生活に慣れていった。ただ、英語の上達の面では3人のうちで一番遅かった。友達と遊んでいる所を見ると、ほとんど英語を使わないでも楽しく遊ぶことができるようであった。

妻は、ボーズマンに着いた日から生き生きとしていた。心身共に日々成長し、何事にも積極的に取り組んでいき、様々な授業や講座を受講した。夜間講座を受講した時は、英作文の授業と思って取った講座は、作家志望の人たちのための創作講座で、日本語でも書いたことのない詩や物語を英語でせっせと書いていた。最初の物語の題名は“Lunch Boy”だった。

私の方は、慣れない日本語の授業に悪戦苦闘しながらも、すばらしい生徒たちとの関わりの中で、教え方だけでなく、様々なことを学んだ。また、アメリカの大学の厳しさも、モンタナ州立大学の先生達との付き合いの中で知ることができた。

日本語の授業以外に、小・中学校で日本の文化紹介の授業を何度か行った。お礼に夫婦でロータリークラブ主催のパーティに招かれ、感謝状を頂いた。大学では、「東洋史」の授業で二度、「禅仏教」についての講義をした。また、国際教育局の依頼で「禅セミナー」を行い、新聞やポスターで知った学外の人たちも含めて45名の人々が集まった。東洋的なものに対する関心の高さは予想していた以上のものだった。

私にとって最も忘れがたい思い出の一つは、サリバン先生との再会と仕事だった。先生は、モンタナの国語教育界においては有名な方で、私がモンタナに来る前から、一緒に講演して回る仕事を引き受けておられた。小学校、中学校、高校の先生方の研修会で、合わせて三度講演した。講演先までの二人での数時間のドライブは、いまでもほのぼのとした想いが蘇ってくる。

毎週土曜日の午前中は、共著で書いたMY WORD : BOOK 1　の原稿を持ってサリバン先生のお宅に伺った。いつもコーヒーとクッキーが用意されていて、二人で大好きな英語の語源についてあれこれと話をした。MY WORD : BOOK 1　は1995年の6月に出版され、96年にはBOOK 2　が出版される。現在、BOOK 3　の原稿を書いている。100ページ程の小さな本ではあるが、ここにはサリバン先生との土曜日の思い出がたくさん詰まっている。

このほかにも、元オリンピック・クロスカントリー強化コーチのクリフ・モンティン先生とのスキーのこと、ロバート・スミス先生とのカントリーダンスのこと、個性的な生き方をしている日本人学生との出会いなど、書きたいことはたくさんある。

今、モンタナは零下20度以下である。しかし、私たち家族がモンタナを思い、語るとき、心は果てしなく熱くなる。

銀杏の意味

深圳大学講師　王　洋

学生時代から学校の始業式に出ることが度々あったが、1995年4月の、あの麗らかな春の日の、熊本県立劇場での学園大学の始業式が一番印象的であった。時間どおりに着いたが、意外に会場はもう人でいっぱいであった。学生にも、学校の教職員にも見えない顔が多くて、ちょっと尋ねてみたが、学生の親たちが多く来ていたことが分かった。その真剣そのものの表情から学園大の教育にどれほど大きな期待がかけられているかが窺える。地域の人たちに関心をよせられながら、地域と一緒に成長してきた、五十年以上の歴史を持っている熊本学園大学の地域との連帯の緊密さが感じられる。また、学園大学の新図書館落成記念式のあの日のことも忘れられない。地元の人が多く招かれて出席している。みなさんは興味深く新図書館のすみずみまで見学した。学園大の図書館は一般市民に開放している部分があると聞いたが、これも一般市民との繋がりの一つになっているのであろう。熊本の地方紙で読んだ、まる六十に近いおばあさんが学園大の短大に入って勉強した話だが、数々の授業に出たり、図書館で興味のある本を読んだりして、ふだん持っていた疑問が解かれて、さっぱりした。そういうような学園大での勉強の楽しみがいろいろと書かれていた。熊本に居た半年間、ほんとうにいろいろと考えさせられたが、特に大学とはどんなものかについて感銘深いものがあった。大学は知識を教える場所でありながら、人たちに理性的に考えさせる場所でもある。社会生活に何か問題が起きた場合、どこか落ち着いて勉強して、理性的に考えることのできる場所がどうにも必要である。その場所は大学以外のどこでもない。そのためには大学は地域の人たちに親しまれる所でなければならない。熊本学園大学はそういうような地域において親しまれている、知的な存在ではないであろうか。

王先生の送別会にて
(中央が筆者)

もう一方、学園大は地域に親しまれていながら、決して地域にとどまっているのではない。学園大学の国際化の幅広さ、国際交流の力強さに心から感心している。我が深圳大学との交流はその中の一つで、ほかにもアメリカ、韓国、イギリス、オーストラリアなど、数多くの海外の大学との交流が盛んに行われていて、次から次へとというような感じである。この拙文を綴っている今でも、翌日の学園大学の国際交流委員長　勝部伸夫先生の率いる研修団の来訪を期待している。

地域への溶け込み、世界への広がり、まさに根が深く張り、葉が茂っている銀杏大樹のようである。これは私の熊本学園大学に対する一番印象的なところである。

韓国'95キーワード

熊本学園大学講師　木下　徹弘

11月中旬、大田はもうすっかり冬景色です。これから3月まではとっても寒い冬が続きます。私の韓国滞在も残すところあと3ケ月ほどになってしまいました。思い起こせば、2月のおわりにここに赴任したときは、大田は緑がほとんどない殺風景な街でした。寒いし、風は強いし、車の運転はあらいし、正直なところとんでもないところに来てしまったと思ったものでした。ところが、4月になると草木は生きかえり、辺りのようすが一変しました。まず、れんぎょう、桜が咲き始め、5月になるとチンダルレが咲き乱れます。その後も野ばらをはじめたくさんの花が咲きましたが、それまでそんなにたくさん花が咲くとは思えないくらいに殺風景だったので、その変わりよう、美しさにはびっくりしました。そして、ついこのあいだまでは紅葉がほんとうにみごとでした。大田の自然はじつに豊かで美しいです。

さて、本日はみなさんに韓国の今年の流行語をひとつ紹介しましょう。現在韓国では「世界化(セーゲーファ)」という言葉がキーワードになっています。この言葉の具体的な定義や内容は誰もよくわかっていないようですが、とにかく新聞やテレビによく登場します。この言葉は英語の“Globalization”の訳語だと思うのですが、経済、政治、文化の面で韓国を世界的にコミットさせていこう、いかねばならない、というスローガンのようです。具体的にどうしていこうということは明かではないのですが、

韓国の学生たちと(右端が筆者)

ひとつ顕著な傾向として、このごろ韓国の人達は英語をすさまじい熱意で勉強しています。日本でも80年代後半の好景気には英語関係のビジネスが雨後の竹の子のようにふえましたが、今の韓国はそのころの日本とそっくりです。大田でも街のいたるところに外国語学院（ウェイグゴハクオン）なるものがいっぱいです。街を歩いているといわゆる外国人（この人たちのほとんどがアメリカ人、カナダ人、オーストラリア人）を多くみかけます。企業も国際化の波に乗りおくれまいと社員の英語教育に熱心です。英語の能力を昇進と関連させているので多くのサラリーマンが仕事のあと街の学院や大学の夜間のコースで英語を勉強しています。また、韓国の大学生の就職は大変難しいのですが、就職活動の際、企業がTOEICのスコアーを要求しているので、学生は必死になって英語を勉強しているようです。バスに乗っていると、学生がTOEICの厚い問題集をかかえているのをよく目にします。英語を集中的に勉強するために大学を1年休学する子もいるようです。ラジオの教育放送では朝7時から8時まで3つの英語プログラムが放送されます。1997年からは小学校でも英語教育が始まるそうです。とにかく、今の韓国は国をあげて英語にすさまじいエネルギーでとりくんでいます。英語は日本人にはとても難しい言葉のひとつですが、韓国人にも同じくらい難しい言葉だそうです。でも、いまのこの国のようすをみていると、10年たったらこの国の人がバイリンガルになっていてもおかしくないくらいの勢いです。韓国の工業化は1960年にはじまり、現在先進国にあと一歩というところまで発展してきました。これまでは物質的な発展であったわけですが、今度は国をあげて外国語という国民の質的素養の1つを向上させようとしているようです。そして、いいわるいは別としてこれまで韓国の経済発展の戦略が量的な拡大であったように、英語教育もとにかく猛烈にやるというやり方で挑戦しているようです。

また来てみたい熊本

大田大学校副教授　尹　一鉉

私が熊本行きを決心したのは10年間の単調な大学での生活からしばらく離れて、日本語を学びながら日本のいろいろな所を直接見たかったからです。こんな気持ちと未知の世界へのあこがれをもって、1995年3月13日、熊本行きの飛行機に乗りました。

空港では嵯峨一郎先生、星子室長、切通さんの暖かい歓迎を受けました。宿舎ではこれから先の日程について詳しい説明を受けました。着いたその日にまず二つの出来事に強い印象を受けました。国際交流センターの室長が自ら車を運転してきて荷物まで積んで下さるのを見て、日本はかなり平等な社会だと思いました。この平等さはその後の日本の生活でしばしば体験させられました。もう一つは日本人特有の用意周到な準備に驚かされました。これからのスケジュールはもちろんのこと、来たばかりの私のため冷蔵庫の中には一日分の食べ物が入っており、研究室には当座に使う筆記用具や用箋等が置かれてあり、細かいところまで気を使っていただきました。このような完璧な準備は徹底的な職業意識から来ると思います。また数日後、天草行きの観光バスのガイドの仕事ぶりも印象的でした。そのガイドさんは天草に着くまでの間、いろいろな名所を説明してくれたり、歌も4、5曲歌ってくれたりして、ガイドとしての仕事を徹底的に果たしていると感じました。

その後も日本の名所を旅行しながら、熊本で生活をしながら、話にだけ聞いていた日本人の親切さを実感することが出来ました。そして韓国人の態度と比較する機会が沢山ありました。日本人の親切さが本に書いてあった「建前の親切」としても、外国人である私にはとても良い印象を与えてくれる。まして私のように一時的な在留者にとってはさらにそうである。

ところで、どうして日本人はこんなに親切なのか何度か考えさせられました。幼いときからの教育はもちろんでしょうが、根本的には自分の満足があると思います。これは社会が安定しているためで、周囲にいる人で急に

本学正門にて

大金持ちになる人はいないし、破格の出世もありえないし、現在の自分とあたえられた環境に満足しているのではないかと思います。

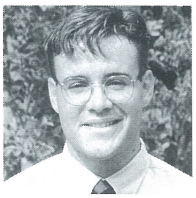
ところで、日本の学生についてあまり感心できませんでした。遅刻する学生は多いし、校庭で会ってもほとんど挨拶することもありません。立派な図書館で空席を見るたびにむなしいものを感じました。学生の多くがアルバイトをしているためだと聞きましたが、授業時間は教員と学生との決まりであるし、学生の本分は勉強であるはずです。アルバイトのためと言うのは納得がいきませんでした。また、感情を抑制するのが日本では一つの美学であると聞いたが、授業中に無表情であるのと、活発な討論が成り立たないのはいただけない。

日本以外にも、もちろん、感情を抑制できず顔色を表す人は未熟だとされる社会は存在するが、日本人はとりわけ感情を直線的に表現することを嫌っているように思える。一方、韓国人は自分の感情を率直に出し直線的なのを人間的と考えている。韓国人と日本人は顔つきがよく似ているので、この感情表現の違いにより、いろいろな誤解が生じやすいと思います。

しかし私は便利な大学の施設と専門書に囲まれ、国際交流センターの細かい配慮のお陰で、水がすばらしく、空気がきれいな熊本で一年間有意義に過ごすことが出来ました。熊本でのいろいろな思い出と日本についてのいい印象を持って韓国に帰れそうです。

最後に、私から韓国語を習ってくれた教職員、学生の皆さんに感謝したいと思います。またとくにお世話になりました嵯峨一郎先生のことはこれからも忘れることはないでしょう。もしまた機会がありましたら、交換教授として来て、見残した日本をみたいと思っております。

交換教員往来


リンゲンフェルター先生

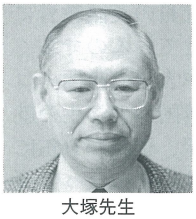
1995年9月、米国・モンタナ州立大学より第12回交換教員のケビン・リンゲンフェルター先生（心理学）が来学。1年間の滞在予定で、英語の授業を担当いただいている。

王先生

同じく9月、中国・深圳大学より第7回交換教員の王方（ワンファン）副教授（体育）が来学。半年間中国語の授業を担当いただいて、3月下旬帰国された。

井上先生

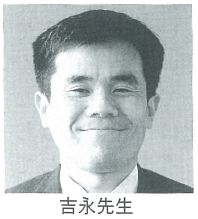
1996年1月、井上勝子教授（スポーツ心理学）が、米国・モンタナ州立大学へ第10回交換教員として赴任。夏まで約半年間の滞在予定。


大塚先生

同年2月下旬から、大塚信生講師（地域福祉論）が韓国・大田大学校へ第9回交換教員として赴任。滞在予定期間は1年間。

慶先生

3月中旬には、その韓国・大田大学校より第12回交換教員の慶益秀（キョン　イック　ス）副教授（商法）が来学された。1年間の予定で、韓国語の授業を担当いただく。


吉永先生

今夏には、吉永心一講師（簿記論）が第4回交換教員として中国・深圳大学へ赴任予定。
滞在予定期間は半年間。

学生交流

1995年　研修団往来

研修団名（受入れ）	来学期間	引率者数	学生数
第7回大田大学校学生研修団	2月4日～7日	2名	23名
第5回モンタナ研修団	5月16日～6月12日	3名	12名
第1回大田大学校夏期学生研修団	7月10日～29日	3名	29名
研修団名（派遣）	派遣期間	引率者数	学生数
経済学部「外国事情研修」米国コース	7月15日～8月15日	3名	118名
経済学部「外国事情研修」韓国コース	7月18日～8月15日	1名	29名
経済学部「外国事情研修」中国コース	7月25日～8月25日	1名	40名
第5回大田大学校訪問学生研修団	8月30日～9月5日	2名	26名
第1回深圳大学訪問学生研修団	9月7日～14日	2名	14名

第5回モンタナ研修団来学

Professor Jim Lee

During a wonderful 'Goodbye Party' hosted for us on May 31 by Kumamoto Gakuen University, I made a short speech of thanks for the many kindnesses shown to us by the students, faculty, friends and, in particular, the staff of the International Office. While making that speech, I was thinking back over twelve years of exchanges between universities in the Montana University System and KGU and all of the friends that were made over those years. Hundreds of people from Kumamoto and from Montana have created a very special relationship over those years and have been changed because of what they have experienced and learned.

After this summer's exchange group returned to Montana, each student wrote a report on her or his experiences during the program detailing what was learned. Professor Montagne and I just finished reading those papers. We were overwhelmed by the amount that MSU students learned in a very short time. Many examples were cited of extraordinary kindness shown by faculty, staff, and students of KGU to our students which made them feel among friends and allowed them to enjoy themselves while learning about Japan. This kindness did not stop at the boundaries of the KGU campus. Everyone in the community welcomed us and extended friendship to us.

Returning to my speech at the 'Goodbye Party,' I said that what was begun as friendship has progressed to another level--we have become like family. To everyone who worked so hard to make our visit to Kumamoto very successful, we send our thanks and appreciation. We will never forget your kindness!

Steve Kimm, Senior, Business

On May 15, a diverse group of 11 Montana State University students set off on a one month adventure to Japan What we discovered was more than any of us expected. We did more than just learn the history and culture of the Japanese. We made many new friends, friends who in the future may help bring the two countries closer together. We brought back a much greater understanding of a culture which is more similar to ours than we imagined.

We were warmly welcomed by the staff and students of Kumamoto Gakuen University. While in Kumamoto, a week was spent with host families. This was the most enjoyable experience of our entire trip. We were able to learn the customs and life styles of the people in Kumamoto. We were also hosted by families in the nearby town of Mifune. Our group would like to send a special thanks to those families who hosted us during our trip. All of us hope to keep in contact with those families and other friends that we made during our trip.

While at KGU, several language classes were provided for us, which were very much needed. Everyone was glad to find that many of the Japanese people could speak and understand English much better than we could speak Japanese. This made our learning experience much easier. It was very enjoyable spending time talking to students and acquaintances.

Throughout our trip, we were continually impressed with the culture, lifestyle, friendliness and beauty of Japan. One month was too brief to learn everything we hoped to learn, but many of us will be back some day to either visit or live. July 15, a group of KGU students came to Bozeman, Montana, to study our culture and economic system. We hope that they enjoyed Bozeman as much as we enjoyed Kumamoto!

禅道場にて

モンタナ研修団滞在日程

月日（曜）	行　　程	宿泊先
5／16（火）	午後8時福岡空港到着　→　熊本	熊本県青年会館
17（水）	午前中休憩・午後本学・午後6時歓迎夕食会	〃
18（木）	終日自由	〃
19（金）	日本語授業・講義・英語ゼミ参加交流会	〃
20（土）	午後スポーツ交流会　ホームステイ先へ	ホームステイ
21（日）	終日ホストファミリーと過ごす	〃
22（月）	日本語授業・講義・午後自由	〃
23（火）	日本語授業・講義・県庁訪問	〃
24（水）	日本語授業・講義・午後自由	〃
25（木）	日本語授業・講義・午後自由	〃
26（金）	御船町訪問	御船町ﾎｰﾑｽﾃｲ
27（土）	〃	〃
28（日）	〃	熊本県青年会館
29（月）	午前中　講義　　午後　本田技研訪問	〃
30（火）	終日阿蘇での研修	〃
31（水）	企業研修　午後6時半～送別会	〃
6／ 1（木）	終日自由（宿舎移動）	西合志研修所
2（金）	午前　養生園訪問	〃
3（土）	午前中　自由　　午後　禅道場訪問	〃
4（日）	農場訪問（田植え）或いは自由	〃
5（月）	熊本　→　長崎　長崎市内観光	長崎ﾕｰｽﾎｽﾃﾙ
6（火）	長崎　→　松江	松江ﾚｲｸｻｲﾄﾞYH
7（水）	松江観光	〃
8（木）	松江　→　鳥取砂丘	砂丘の家
9（金）	鳥取　→　京都	旅館　京花
10（土）	京都観光	〃
11（日）	京都　→　東京　東京観光	成田東急イン
12（月）	9：40　東京　→　ソウル	—

第1回大田大学校夏期学生研修団来学

猛暑の熊本で猛勉強

国際交流センター事務室長　星子　三郎

韓国・大田大学校に日語日文学科が誕生して3年が経ちましたが、昨年7月には第1回の夏期学生研修団29名が来学した。

一行は、法学科・経済学科・会計学科（2名）・貿易学科（2名）・行政学科（2名）・家庭管理学科（2名）・日語日文学科（19名）の学生で日本語・日本事情を学ぶために7月10日（月）～7月29日（土）までの3週間の日程で研修。

研修内容として、毎日2時間の日本語語学講義はⅠが読解・文法、Ⅱが会話と分けて平井淑子先生、福山壽子先生にご担当いただいた。

学生達の積極的に学ぶ姿勢には、教える側の先生も奮励された様子だった。

4回シリーズの日本事情特講としては「日本の労使関係（嵯峨一郎先生）」、「日本の企業システム（勝部伸夫先生）」、「日本の産業構造（朴哲洙先生）」、「日本歴史の特質（朴宗根先生）」が韓国語による講義として開講された。

企業見学研修では、本田技研熊本製作所・日立造船有明工場を訪れて眼の前でオートバイの組み立てや造船作業を見学、熱心に説明に聞き入っていた。企業に於ける安全への周到な配慮・管理にはビックリした様子だった。

夏目漱石旧居も訪問しました

週末の野外活動としては、小旅行で阿蘇に出掛け雄大な阿蘇山の景色を眺めながら夜はキャンプファイアーで楽しい一時を過ごした。天草への小旅行も五橋を渡って松島の千厳山へ登り、紺碧の海に浮かぶ島々の素晴らしさに感嘆の声を上げていた。夜は県立青年の家に宿泊、楽しい交流ゲームに熱中した。

また熊本市内の散策活動では、伝統工芸館、ラフカディオハーン旧居、夏目漱石旧居などを日本人学生の案内で訪れ、熊本事情を探索した。

猛暑に敗けじと頑張る研修生はホームステイ交流や、キャンパスでの自由交流に活発に動き廻り、若者同士で楽しい話の花を咲かせていた。

学食での食事にも諸々配慮がなされ、キムチは勿論のこと、ビビンパップまで準備され、韓国の学生は大いに元気を取り戻していたようだ。また、彼らがキャンパスの方々で丁寧に挨拶をする光景や、積極的に日本語で話す姿勢が大いに好感を持って迎えられていた。

3週間に互る研修期間を通して生活の拠を構えた西合志研修所での暮らしは、グランドでスポーツに汗を流したり、自分で洗濯をしたりと思い思いの過ごし方だったようだ。

7月28日の修了証書交付式では本学の受入れ実行委員長である勝部伸夫国際交流委員長から一人一人に証書が渡され、講師の先生方からは研修を慰労するご挨拶をいただき、3週間の研修を締めくくった。

この貴重な研修の経験を糧に帰国後の研修生のご健闘を祈るものである。

日本語の研修も毎日みっちり

1995年　第1回大田大学校夏期研修団日程表【第1週】

	7.10	7.11	7.12	7.13	7.14	7.15
	月	火	水	木	金	土
クラス			A B	A B	A B	
10：00～11：00	10：15ｿｳﾙ		日Ⅰ 日Ⅱ	日Ⅰ 日Ⅱ	日Ⅰ 日Ⅱ	『天草』
11：20～12：20	11：35 熊本空港	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ・ｷｬﾝﾊﾟｽﾂｱｰ	日Ⅱ 日Ⅰ	日Ⅱ 日Ⅰ	日Ⅱ 日Ⅰ	千巌山登山
13：30～15：00	昼食 研修所入所式		市内見学 熊本城、伝統工芸館	日本事情特講①	『天草』 五橋 松島	
15：00～17：00	研修所周辺散策	ｸｲﾝﾃｯﾄ 音楽鑑賞		国経事前研修参加		
17：00～			歓迎会	国経学生との交流		
備考					青年の家	

【第2週】

	7.17		7.18		7.19		7.20		7.21		7.22
	月		火		水		木		金		土
クラス	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	
10：00～11：00	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	『阿蘇』
11：20～12：20	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	ｳｫｰｸﾗﾘｰ
13：30～15：00	企業訪問 本田技研		夏目漱石旧居		日本事情特講②		企業訪問 日立造船		『阿蘇』火口		白川水源
15：00～17：00	菊池水源		自由活動		自由活動		民家村（菊水）				
17：00～									ｷｬﾝﾌﾟﾌｧｲﾔｰ		
備考									青年の家		

【第3週】

	7.24		7.25		7.26		7.27	7.28		7.29
	月		火		水		木	金		土
クラス	A	B	A	B	A	B		A	B	
10：00～11：00	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	ﾎｽﾄﾌｧﾐﾘｰと共に	日Ⅰ	日Ⅲ	
11：20～12：20	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ	日Ⅱ	日Ⅰ		日Ⅲ	日Ⅰ	
13：30～15：00	日本事情特講③		日本事情特講④		ホームステイ		自由活動			12：35 熊本空港出発 帰国
15：00～17：00	自由活動		近代文学館見学		自由活動					
17：00～			自由活動					送別会		

注記:日Ⅰは、日本語Ⅰで文法を中心とする科目
日Ⅱは、日本語Ⅱで会話を中心とする科目

夏期研修を終えて

大田大学校　日語日文学科　助教授
朴　喜南

第1回大田大学校夏期研修団の熊本学園大学での研修が7月10日から29日まで3週間の日程で行われました。両校は教職員交流や短期訪問団の活動などいろいろな交流の実績をもって相互理解を深めてきたと思います。それに加え、大田大学校の学生に夏休みの期間日本語、日本文化、日本事情などを勉強する機会が与えられ、学生としては日本を理解するとてもいい経験となり熊本学園大学側に深く感謝申し上げます。

7月10日熊本空港に着いた研修団を国際交流室のみなさんが明るい笑顔で迎えてくれました。熊本は落ちついて明るい感じの町でしたが大田よりは暑かったです。大学で食事をしてから研修所で入所式が行われました。研修団は3週間という長期間滞在する関係で生活の面もとても重要だと思います。

熊本へ行く前に何度か教育はしましたが、学生たちが、日本の研修所などの規則とか習慣がよく分からないので心配しました。しかし研修所の所長をはじめ、みなさんがほんとうに親切にしてくださいましてみんな元気でよい生活になったと思います。

日本語、日本事情の授業とともに、午後の熊本見学、企業視察、阿蘇、天草などの名所見学など学生達はとても楽しく過ごし、日本がよく理解できる最高のプログラムではなかったかと思います。大田大学校でも3年前から国際経済学科の学生達をむかえ、夏の講義を行っていますがこういう研修の方法は大いに参考になったと思います。

その後の話ですが、夏の研修に参加した日本語学科の学生の中で何人か勉強に対する態度がすっかり変わりました。夏にずいぶん刺激を受けたようです。彼らとしてはたいへん大きな経験になったと思います。大田大学校の学生のため、このようなすばらしいプログラムを計画してくださった学長をはじめとする熊本学園大学の関係者の皆様、講義を担当してくださった先生、最後まで親切に学生の面倒をみてくださった国際交流センターの皆様に深くお礼申し上げます。

夏の研修が終ってから

大田大学校　日語日文学科4年生
林　陽花

去年、日本での三週間の研修の時を振り返って見ると、知らず知らずに私の顔には笑みが浮かびます。私としては今まで経験できなかった時間だったと思います。多くの人は、日本と韓国は同じアジアの国だからあまりかわらないだろうと思っています。

もちろん私も同じ考えでした。そのせいで研修中私は他の研修生よりエピソードが多かったです。その中でも一番困った事はトイレ事件でした。韓国にない物が、日本のトイレの壁にはあったのです。

「気分が悪い方はこのボタンを押して下さい」

「そう。私今の気分がちょっと悪いんじゃない。これから授業もあるし、授業の前、気分転換でもしてみようかな。押してみよう。」しかし、音楽も出ないし、なんの変化もありませんでした。

「なんだこれ、何もないじゃない。しまったな」と思いながらトイレから出ました。その時、女の方二人が私に向かって急いできました。びっくりしている私に二人はそのボタンのことを説明してくれました。好奇心と私の下手な日本語のせいでおきた出来事でした。その後、私の日本語のノートには「気分」という単語がきちんと書いてあります。「気分が悪い」という日本語の意味も。

阿蘇へ行った時、フォークダンスを教えてくださった白髪の先生、一緒に踊った日本の友達、研修所で野球をした時、ホームランを打ってからすごく喜んでいた研修所のおじいさん。

帰って来て時間が経っても日本での思い出は一生忘れられないだろうと思います。韓国でテキストで勉強した日本と、自分で経験した日本はだいぶ違いました。日本で習った親切さはこれからの私の人生にもプラスになるだろうと思います。日本はやっぱり信頼感がある親切な国だったと思います。また日本へ行く機会があれば、その時は日本語より韓国のことをもっとしっかり勉強したいと思います。

自分自身のことに関して知らない人は、外国のことをいくら勉強してもよく分かるはずがないと思います。

短い期間でしたが、日本での経験は本当によかったと思います。そして、最後まで親切にしてくださった国際交流センターの方々や日本の友達に深く感謝いたします。ありがとうございました。

第5回大田大学校（姉妹校）訪問を終えて

熊本学園大学教授　宮崎　俊策

第5回、韓国の大田大学校姉妹校訪問の旅は、1995年8月31日より9月5日までの日程であった。訪問団の総数は28名。学生26名に、教職員2名の構成である。

昨春、学園大学校内の掲示板を通して訪韓の呼び掛けに応じ、レポート提出後の審査と本学国際交流センターの企画した韓国語の定期学習会や、韓国事情・姉妹校理解の一泊合宿を8月上旬までに消化して、31日に出発。学園バスにて博多港へ到着。カメリアラインに乗船し、一路釜山港へ向かった。

諸注意がききすぎていたのか、船内探険が終った後の船室の学生は物静かそのもの。翌日の話では、外海にでたあとの船の揺れや、2日後のホームステイが気になって、早々の眠りについたとのことだった。今回の研修旅行では、男女学生2名を学生代表として選出。要所のプログラムでは、事前に代表との具体的打ち合わせを行い、移動中のバスの中で全体に周知徹底していく方法をとったが、総じて時間の管理が上手く行われており、その他は学生の自主性に任せることにした。学生にとっては全てが貴重な異文化体験であったが、中でも最高の山場は、2日目の姉妹校訪問の時であったようだ。

慶州から高速道路を正に高速で大田に向かったバスは、遅れめの4時間後、姉妹校の1号館（本館）前に横付け。現地学生たちが待ち受けている歓迎会場へと案内された。拍手で迎えられる学生たちは緊張そのもの。やがてこの後には、パートナーが紹介されてホームステイが待ち受けている。しかしこの緊張は両学校代表の挨拶が終了した後の、双方の学生代表挨拶で一気に破られた。大田大学の学生代表が流暢な日本語の挨拶をした後、本学学生代表のジョークも交えた韓国語の挨拶で、出席者双方が爆笑につつまれたからだ。隣席の呉総長先生の「宮崎先生これがほんとの国際交流ですよ。互いが相手国の言葉で挨拶をする。これが理想です」の言葉が、未だ忘れられない。

大田にて3日滞在の最後の夜。所用で外出して車で戻ると、深夜の1時頃、ホテル前の川沿いの屋台は、韓国語と日本語の交じった賑やかな声が聞こえた。何と自然に盛り上がった非公式のお別れ会。翌朝の出発時には、目頭を熱くした学生たちの顔があった。姉妹校との交流の3日間、本学の訪問団を終始温かく受け入れていただいた、大田大学校の関係者の方々に改めて、深い感謝を申し上げたい。

慶州ナザレ園の老人たちとの歌合戦、独立記念館の衝撃、緊張の板門店。学生たちは、歴史の刻みの一齣を駆け足で回った。深い理解や感動には個人差があるが、帰国後、外国関係のニュースには関心を持つことが多くなったという。

第5回大田大学校訪問学生研修団日程表

期日	行程		宿泊
8／30（水）	13：30	本学出発	船上泊
	15：30	博多港到着	
	17：30	博多港出発〔フェリー（カメリアライン）〕	
8／31（木）	8：40	釜山港着	〔慶州泊〕現代ホテル
	9：20	釜山港発	
	9：30	釜山市内見学（釜山タワー・チャガルチ市場）	
	11：30	慶州到着・昼食	
		・仏国寺、石窟庵 ┐ 見学	
		・国立慶州博物館 ┘	
9／1（金）	9：30	・慶州ナザレ園訪問	
		・古墳公園（大陵苑）、天馬塚	
	12：00	昼食後、慶州出発	
	16：00	大田大学校到着	ホームステイ
		歓迎式	
9／2（土）	10：00	大田大学校キャンパス見学	〔大田泊〕文化観光ホテル
	11：30	大田EXPO展示館見学	
9／3（日）	10：00	ホテル出発	
		独立記念館見学	
	夕刻	大田市内散策	
	18：00	送別会・晩餐会	
9／4（月）	10：00	大田出発	〔ソウル泊〕コリアナホテル
	午後	ソウル到着・昼食	
		・景福宮 ┐ 見学	
		・国立民俗博物館 ┤	
		・南大門市場 ┘	
9／5（火）	9：00	板門店（6時間）見学出発	
	14：30	観光及びショッピング	
	17：00	金浦国際空港到着	
	19：00	KE734　金浦国際空港発	
	20：10	福岡空港着	
	20：45	福岡空港発〔大学バス〕	
	22：50	大学着	

注）□内は姉妹大学の韓国・大田大学校側が案内されました。

旅行保険証を忘れ、学園バスを追い掛けた学生。ホテルで布団を奪い合った同室の者。しみじみと日韓関係を感じた学生。大田の自由行動で迷子になり、警察署に駆け込んだグループ。到着前、軍事緊張の板門店で友人にキムチを買って帰りたいがと質問に来た者。個人個人の珍体験や感動は、旅行後、有志によって編集された報告集に記載されている（国際交流センターにも保管）。

研修団の
学生制作報告書

第1回深圳大学訪問 学生研修団の深圳訪問

熊本学園大学助教授　西　紀昭

深圳大学とは既に様々な交流が行われており、ゼミ単位では多くの学生が深圳大学を訪れている。これまでに本学の正式な学生訪問団が派遣されていなかったのが不思議な位である。

ともあれ、本年9月7日から約一週間、深圳を中心に、南京、上海等の都市を訪問し、9月14日無事帰国した。

深圳は9月というのに異常に暑く、連日36度を越える猛暑であった。加えて湿度も高く、全員汗びっしょりになりながら、交流プログラムをこなしていた。

深圳大学側は外事処の侯先生を中心に、かつて本学に交換教員として来られた、郭先生、戴先生、姚先生といった方々が実に熱心に訪問団のお世話をしていただいた。又、応副学長も二日目朝早くにお会いいただき、本学学生に話をしていただいた。本学と深圳大学の強いつながりが学生達にもよく理解できたと思われる。さらに二日目午後には深圳大学の手配で、「三洋電気」と「新華繊維」二社の企業参観ができ有益であった。特に「三洋電気」では新保社長自らが説明に当られ、学生からの質問も活発であった。その後、深圳市の老街で自由行動の時間をもった。最初は人々の熱気に圧倒されていたが、次第に馴れ、全員結構楽しんだようである。スリにねらわれた学生が二人いたが、バッグのチャックを開けられただけで、幸い被害は無かった。

南京長江大橋から揚子江を臨む

三日目には朝から夕方まで深圳大学の学生との交流を行った。全員の自己紹介から始まって、グループ討論、更にはグループごとの学内参観、そして双方の学生による昼食会と続き、打ちとけた雰囲気になっていった。午後はスポーツ交流としてバドミントンと卓球の交流試合を行ったが、余りの暑さに皆少々バテ気味であった。しかし、学生諸君にとっては一番楽しい日ではなかったかと思われる。夜には深圳大学の学生諸君が部屋に訪ねて来て、かなり遅くまで交流が続いていた。今回は深圳大学の代表の学生の他に、戴先生の日本語のクラスの学生も夜宿舎に来てくれて交流の輪が広がっていた。学生間の交流の面では大きな成果をあげてくれたように思える。

気候も大変暑かったが、学生どうしの交流も熱烈であったと評価してよいであろう。

深圳の次に訪問した南京は一転して涼しく、快適であった。南京の最も大切な参観場所は南京大虐殺記念館であったが、全員事前によく学習しており、日本人の若者として恥ずかしくない参観態度であった。事前学習をしていたとは言え、この記念館で受けた衝撃は大きかったようである。その後参拝した雨花台烈士陵園では、突然の雨で中国の人々が皆雨宿りしている中を、我々の団全員が濡れながら烈士像の前まで進み、参拝を無事すませた。記念館の参観をすませたばかりで、日本人として何かしたいという全員の気持ちの表れであったように思われる。この事は翌日の南京城壁修復ボランティア作業の時にも続いており、重いレンガを運ぶ作業を全員積極的に行い、中国側係員の終了の声がかかっても、もう少し、もう少しと時間を延長して作業を続けていた。又、足を二十ケ所以上も蚊に刺されながら黙々と作業を続けた学生もおり、3K職場を嫌う学生が多いなど、どこの国の話かと思われる程であった。南京で学生諸君の本当の姿を見たという気がする。南京に行ってよかったと今痛感している。第二回目以降も是非南京に行ってほしいと思う。

上海では自由行動の時間を多くとったが、集合時間に遅れる者もなく、その点では実にキチンとした訪問団であった。又、上海で参観した日中合弁企業の社長には大変大きな刺激を受けたようだが、この人を手本とするような学生が一人でも二人でも出てほしいと願わずにはいられなかった。学生諸君の今後に期待する。

研修団の学生制作報告書

第1回深圳大学訪問学生研修団日程

	期日	全体の行程	場所	備考
①	9／7 木	7：30 熊本学園大学集合　出発式		
		8：00 熊本学園大学集合〔付属高校バス〕		
		9：30 福岡国際空港到着　出国手続き等		
		11：45 MU（中国東方航空）518便		
		12：30 福岡空港45分遅れで出発（時差1時間）		
		13：30 上海へ到着		
		14：35 SF（上海航空）375便上海出発		
		16：25 深圳へ到着		
		17：30 深圳大学へ到着		
②	9／8	8：45 深圳大学応啓瑞副学長表敬	明徳苑	
		9：30 中国銀行にて換金〔深大バス〕	本館211室	
		10：30 ①企業訪問		
		・日中合弁企業／「三洋電気」（新保克司総経理応対）		
		12：00 深圳大学にて昼食	明徳苑	
		13：30 ・台湾合弁企業／「新華繊維」（劉君副総経理応対）		
		15：00 ②深圳市内と老街を歩く	明徳苑	
		19：00 深圳大学にて夕食	又一客舎	
		20：30 戴璪之先生日語クラス学生との交流会		
		23：00		
③	9／9 土	9：00 ③学生交流・座談会	本館2室	両校交流に関する懇談
		11：00 ・交流学生案内によるキャンパス見学		
		12：00 ・学生との午餐会	教職員レストラン	
		13：30 ・スポーツ交流会（バドミントン・卓球）	元平体育館	
		16：00 ④民俗文化村参観　〔深大バス〕		
		18：00 ・夕食	雲南レストラン	深圳大学又一村客舎3泊
		19：50 大学へ向けて出発		
		20：30 昼間交流した学生が宿舎を訪ねてきた		
④	9／10 日	7：15 深圳大学出発〔深大バス〕		
		7：40 深圳空港到着		
		9：00 CZ（中国南方航空）3559便		
		10：55 南京到着		
		昼食		
		13：15 ①雨花台烈士陵園		
		②太平天国歴史博物館		
		③侵華南京大虐殺遇難同胞紀年館（陳平穏副館長応対）		ビデオ鑑賞
		④南京長江大橋		
⑤	9／11 月	8：30 ①中山陵・孫権の墓・霊谷寺		
		昼食		
		13：30 南京市内自由散策		
		15：00 ⑤南京城壁修復ボランティア参加		南京古南都飯店2泊
		16：00 ⑥玄武湖散策		
		18：00 夕食		
		20：30 全体ミーティング		
⑥	9／12	8：40 南京西駅発　遊1　列車にて上海へ		
		12：30 上海駅到着		
		15：00 ①魯迅公園		
		②魯迅記念館見学		
		夜 ③上海雑技鑑賞		
		22：00 ホテル到着		
⑦	9／13 水	9：00 ①外灘		
		10：00 ②南京路周辺自由散策		
		12：00 昼食		
		13：00 南京路周辺自由散策		
		15：00 浦東開発地区と区内企業訪問		華東大酒店2泊
		16：00 日中合弁企業／「上海双鹿中野冷機有限公司」（谷口泰史総経理・水野順之副総経理応対）		
		20：00 全体ミーティング		
⑧	9／14 木	6：00 出発		
		8：15 MU（中国東方航空）517便上海出発		
		10：35 福岡到着		
		12：40 大学到着〔付属高校バス〕		

1995年度経済学部「外国事情研修」を終えて

前経済学部長　岡本　悳也

経済学部の「外国事情研修」も1995年度をもって4年目を終了しました。一周目を廻り終えて、今年度はいわば2周目に入ることになります。この間プログラムの内容にも少なからぬ修正を加えてきました。主な修正点は、1　研修年次を3年生から2年生に降ろしたこと、2　単位数を4単位から6単位に増やしたこと、3　国際経済学科から経済学科にも広げたことです。これらの修正は研修効果、研修内容に即したものであることはいうまでもありません。

年々参加者が増加傾向にあることは大変喜ばしいことです。関係者一同、特に歴代の国際経済学科長、国際交流センターの担当者・川邊さんの獅子奮迅の努力もさることながら、研修参加学生の肯定的評価が後輩に口コミで伝えられていっていることが一番大きな要因で、いろいろ苦労もありましたが、経済学部のカリキュラムの特徴としてしっかり定着したものと思っております。この肯定的評価がなにによるものか、若干の自画自賛もふくめて次のように考えています。

1　海外旅行自体は現在めずらしいことでもなく、難しいことでもありません。しかし、1ケ月近い短期留学となると費用その他さまざまな理由で依然として少なからぬ決心がいるはずです。なんといっても学部が責任をもって主催しているということが学生にも保護者にも安心感をあたえて、大量の参加者につながっていることはまちがいないと思います。学生が個人で大量に留学するような時期が来るまでは、このプログラムの意義は大きいということです。

2　学生は留学中は基本的には寮で共同生活をします。経済学部等の文系の学生は正規のカリキュラムでは同じ学部生、同じ演習生であってもなかなか濃密な交流の機会は少ないものです。始業時に教室に馳せ参じ、終わるとさっと散ってしまうからです。結果、高校の同窓生、クラブの仲間としか交流しないということになりがちです。しかし、海外で同じ屋根の下、同じ釜の飯を食うという濃密な経験はきわめて貴重なものとなっているようです。学生の大学生活は一挙に広く、深くなるからです。この点も有意義、かつ魅力となっているようです。

3　このプログラムでは米国、韓国ではホームステイの機会があります。ホームステイのない中国もふくめて姉妹大学の担当者達はわれわれの要望によく答えて現地の様々な施設（日系企業、教会、市庁舎　等）、場所（公園、墓地等）の見学をプログラムにふくめて異文化理解と経験の機会をふんだんに準備してくれています。この点は姉妹大学と提携した大学主催のプログラムならではの、大変教育的意義が大きく、魅力になっていることが学生達のレポートでよくわかります。

4　普段あまり勉強しないわが学生達が、留学中は緊張感と新鮮さのせいでしょうよく勉強するということです。

経済学部「外国事情研修」参加者推移

年　度	92年度	93年度	94年度	95年度
研修参加者数				
米　国	106名	80名	118名	109名
中　国	12名	40名	41名	41名
韓　国		13名	29名	17名
計	118名	133名	188名	167名
応募者数	118名	133名	237名	200名

そこで最後にこの研修の今後の課題ということになります。以上のように有意義な留学経験を留学期間中だけに終わらせないことです。外国語の継続性については、経済学部独自の「経済学部認定私費留学制度」の設置、TOEICのいっそうの活用等にすでに取り組んでいます。なお今後はパソコン通信等とのリンク、活用が考えられます。しかし、より根本的には留学中の学生の緊張感と新鮮さをここ学園大学での日常の生活、学習にいかに定着させるかという重くて、大きな課題を常に意識して学部教育に取り組むことでしょう。

「海外研修」に飛躍・雄飛の夢を託して

外国語学部長　山田　知良

周知の通り、本学部は国際化時代の下、地域社会の要請を受けて、平成6年4月に発足した。設立準備段階から、学部の性格上出来るだけ多くの学生諸君に在学中に様々な意味において海外の事情を経験してもらおうとの思いから、選択必修科目の一つとして「海外研修」を履修規定の中にもりこんだ。

これを受けて、発足以来先ず第一段階として、英米学科、東アジア学科の両学科長を中心にした関係教職員は度重なる合議の上、研修受入れ先の候補を決定した後、イギリス、アメリカ、中国、韓国におけるそれらの大学・教育機関と文書による交渉を重ね、ようやく全ての受入れ先候補機関から大筋で了承をとりつけることが出来た。これに基づき、次の段階として、上記教職員は、今年度の夏期休暇を含むその前後の期間を利用して、現地での精力的な直接交渉を通して相当に子細な点まで実際の計画を煮詰め、計画の具体化が可能であるとの自信に満ちた判断が下せるまでになった。それでこの程、学生諸君に対しては説明会を催し、保護者に対しては本計画への理解を求めるべく案内文を配布した。

本学における海外研修の試みは、経済学部国際経済学科が先鞭をつけ、その後同学部経済学科も採り入れてそれぞれその実を挙げているが、言うまでもなく本学部としては最初の試みであり、今後いろいろと改善を重ねていくことになる。それにしても、保護者の理解と経済的、精神的支援が必要であることは勿論のこととして、この場合、何よりも重要なことは、学生諸君が意欲的・積極的にこれに関わることである。希望する学生は、準備段階における諸先生方のご苦労を肝に銘じ、選択必修科目として単位修得を伴う研修であることに留意して研修に取り組まなければならない。以下に本研修の概要を記す。

◆研修目的

研修目的は、外国の風土に身をおき、日常生活や大学の講義を通じて異文化に触れることにより、新しい知見を得る一方、自国を客観的に認識し、本学での学習をより実り豊かなものにすることにある。外国の諸事情は、書物で得た知識とは大きく隔たっていることが多く、また聞きしに勝ることも多々あることである。これらに、若く柔軟で豊かな感受性を持って直接触れ、各自が各様に反応することが貴重な経験となることは疑いを入れないし、先方の教育機関での平素と変わらぬ厳しい教室の雰囲気が自国の教室での自分の姿勢に反省を迫ることも考えられ、これらは共に本研修の積極的評価を生む機縁となるであろう。

◆研修場所・内容と単位の認定

研修場所：リバプール・ジョン・モーズ大学（英国）
モンタナ州立大学（米国）
北京第二外国語学院（中国）
延世大学校延世語学院韓国語学堂（韓国）
研修内容：外国語（英語・中国語・韓国語）の授業と小旅行など

◎授業及び単位認定

英国・米国コース：① 授業開始前のテストの成績により、1クラス12名～15名のクラス編成となる。② 一週30時間程度で約3週間、英語を中心に英・米国史、英・米文化、英・米国社会に関する授業が行われる。③コース終了時にテストがあり、その成績、レポートの評価により単位が認定される。レポートは帰国後まとめる。

中国コース：①授業開始前のテストの成績により、1クラス10名～15名のクラスに編成される。② 一週20時間午前のみで3週間、土曜日は休み。中国語を中心に、中国文化に関する授業が予定されている。③ コース終了時のテストにより単位を認定。

韓国コース：①授業開始前のテスト（筆記・口頭）の成績により、12名程度のクラスに編成される。② 100時間の総授業時間のうち、最低85時間の出席が義務づけられる。不足する場合は、成績は出されず、本課程の修了が認められない。③成績は、コース終了時の試験と毎週のクイズ、宿題、授業中の態度、出席率により評価される。

◆事前研修

英国・米国・中国コース：語学の事前研修として、外国語研修センターのクラスへの出席を勧めると共に、これら三国の諸事情についての説明会・研修会をも催す。

韓国コース：1996年4月から、毎週一回、韓国諸事情に関する講座が用意される。

交換留学(派遣)

学年は平成8年3月現在

アメリカ 派遣学生

経済学部 国際経済学科4年
宗野　泰之

N.Yの地下鉄にて
(世界各国の留学生と共に)

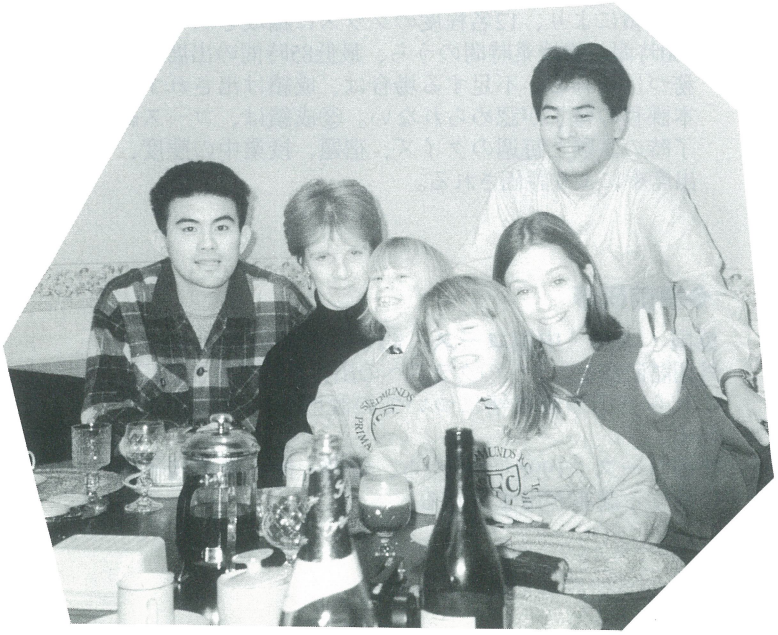
私にとって留学というものは、大学に入学してからも他人事だと思い込んでいた。しかし親友の米国への留学や自分が班長として参加した国際経済学科の海外事情研修といった出来事が私を刺激して、留学することを決意した。特に後者は留学する前の大事なターニングポイントだったといえる。

1993年夏、国際経済学科の研修で1ケ月間、米国モンタナ州で友人達と共に勉強し、共に遊んだ。生まれて初めて体験する英語だけの授業も最初は戸惑うことばかりだったが、日毎に理解を深め英語による質問や与えられた課題を難なくこなせるようになった。せっかく慣れてきたのも束の間、あっと言う間に1ケ月経ってしまって帰国の日。研修でお世話になった先生方と別れを惜しんでいる時、私は心の中で「またモンタナへ戻ってくる」と誓った。帰国後に受けた試験で運良く留学が決まり、1994年夏、再びモンタナへ向かった。

ボーズマン市にあるモンタナ州立大学へ留学したのだが、生活全般についてはほとんど問題はなかった。というのも、前回の研修ですでに体験済であったからだ。しかし学習面だけは大きな違いがあった。研修での先生の講義は日本人向けの喋りであったのに対し、今度は周りが皆米国の学生ばかりなので、先生の会話のスピードはかなり速く感じた。最初は何を言っているのかさっぱり解からなかったが、先生に解からなかったところを講義後に質問をし、それを重点的に復習していくうちに勉強するコツを覚えた。そして1年間終わってみると、経済の科目を中心に20単位取得することが出来た。これは私にとって一生の財産である。

財産としてもう一つ大事なものは友人である。米国の学生と仲良くなり寮生活が楽しくて仕方がなかった。その上、米国に来ていた世界各国からの留学生とも仲良く遊んだ。オランダ、ドイツ、フィンランドの友達と冬休みに1ケ月間かけて車による米国一周の旅は最高の思い出である。時にはホテルで、時には安いユースホステルで、時には車中で泊まり続けた。彼らとの友情もこの旅で深まり、今でも文通を続けている。

最後にこれから後輩である皆さんに1つアドバイスがある。たとえ英語が得意でなくても、英語を楽しもうという気持ちさえあれば必ず上達する。私はこの気持ちをいちばん大切にして留学したのであって、英語の成績は今でも優秀ではない。とにかく留学は誰にでもチャンスがある！この文を読んでいる君にも、そしてあなたにも！



レストランで(左端が筆者)

イギリス 派遣学生

経済学部国際経済学科 4年
佐藤　誠二

僕は、中学1年の時に英語を勉強し始めた時から、英語にとても興味があり英語が大好きだったのですが、日本にいる時は、実際海外の留学生と話すことは、ほとんど出来ませんでした。留学生と自然に会話をしている人達をいつもうらやましく思い、自分もいつか話を出来るようになりたいと願っていました。しかし、声をかける勇気さえなく、自分の英語は本当に役立たずだ、と投げやりな気持ちになっていました。そんな僕が大学の留学の試験に挑戦して、幸運にも交換留学生に選ばれたとき、周囲の人達が心配するよりも、自分が一番心配で不安で

した。海外旅行も一人暮らしもしたことがなかったので、熊本から遠く離れたイギリスのリバプールで9ケ月も生活する、ということが全く想像出来なかったのです。

イギリスという国に特にこだわった訳でもなく、イギリスに対する先入観などがほとんどなかったおかげで、かえっていろんなことを新鮮な喜びとして受け止めることが出来たような気がします。

リバプールでの生活は本当にすばらしいものでした。僕はイギリス人の生活をじかに経験してみたかったので、ホームステイを希望しました。二人のアイルランドの兄弟も同居していて、ホストファミリーの両親と五人で寝食を共にしてきました。イギリスの伝統的な行事を全て間近に体験して、しかも両親は特に世界中のいろいろな料理に興味を持っていて、毎日バラエティに富んだ食事を楽しむことが出来ました。

僕は、歌うことがもともと好きで、大学の学園祭のカラオケコンテストで優勝したことがありました。この両親に英語の歌もたくさん習いました。クリスマスなどのホームパーティでお客さんが多く来たときはいつも、お父さんのギターに合わせてみんなの前で歌ったりしました。また地元のパブによく連れて行ってもらって、そこでは生バンドの演奏が聞けるのですが、実際にその前で歌うことも出来ました。（教えてもらった歌を歌ったら、飲みに来ていたお客さんが一緒に合唱したり踊ったりしていました。）

大学生活も充実していて、多くの友人を持つことが出来ました。日本からの留学生はそれほど多くないのですが、日本語を勉強している学生や日本に興味のある人達と多く出会い、お互いに言葉を教え合ったりしています。日本語を勉強している学生は授業で覚えなくてはならなかったとかで、「雪国」と「すごい男の唄」を歌うことが出来ます。また、その学生の一人が阪神大震災の被災者のためのチャリティとしてカラオケパーティを企画して、集まったお金を全部、日本に送ったという話も聞きました。また、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アラビアと世界各国からも留学生が来ていて、それぞれの文化をじかに感じることが出来ました。週末には、そんな友人達と、学生のために設けられた安いパブに飲みに行ったり、ディスコに踊りに行ったりしています。それぞれの国の友人から直接に言葉を習ったりして、もっともっといろんな言葉を勉強したい気になります。

大学には新設された図書館やコンピュータールームなどがあり、スタッフが充実しているので、分からないことがあっても親切に教えてくれます。安い学食もあります。

リバプール市内には、買い物しやすい比較的大きな商店街があり、劇場や美術館、映画館なども日本に比べてずっと安い値段で利用することが出来ます。バスやタクシーなどの交通機関も充実しています。

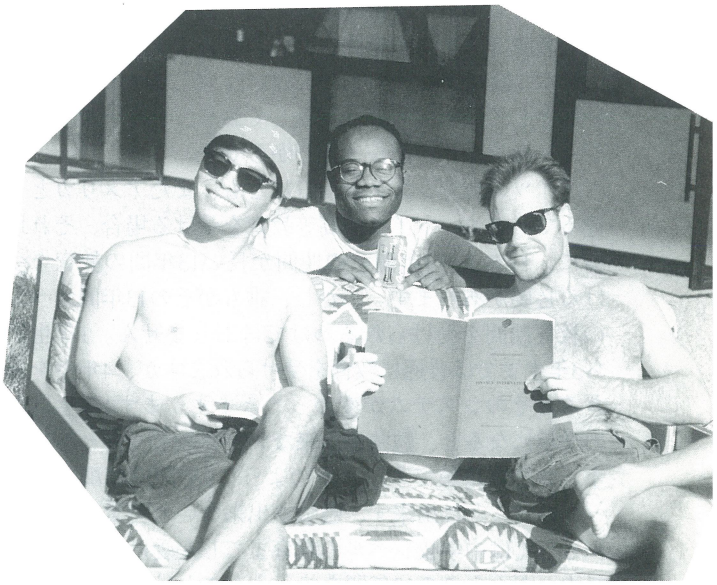
リバプールで9ケ月間いろんな人達と生活してきて本当に、単に英語を勉強するというだけでなく、グローバルな物の見方、考え方が出来るようになったのではないかと思います。

フランス派遣学生

商学部商学科4年
松岡　高弘

留学中私が最も苦手で、一番の苦痛でもあったのが、グループ学習でした。これは3、4人でグループを作り、1学期に2、3回レポートを提出するというものです。グループを組んだ時点で、「私はフランス語がうまく話せない。」と断わります。そのときは、みんな「そんなのたいしたことじゃないよ。」と言ってはくれるのですが…。言葉の問題だけでなく、学問的にも他のメンバーに劣る私は、自然と浮いてしまい、数回行われるミーティングの時も自ら発言することはほとんど無く、ただそこに座って時々うなずくばかりでした。

結局何らレポートに関わる事なく、表紙に名前だけ載せて提出といったこともありました。この、グループに貢献できない心苦しさというか、申し訳無い気持ちは相当のものでした。“肩身の狭い思い”とは、まさにこのときの私のためにあるような言葉だと思いました。積極的に参加しなければという気持ちはもちろん持ってはいたのですが、そのことによってグループ全体に迷惑がかかるのは絶対に避けたい。正直なところ、私が何もしな



寮の友人達と(左端が筆者)

いのがグループにとって最良なのは事実だったのです。何度そのグループを抜け、レポートを放棄してしまおうと思ったことかわかりません。このときは本当に自分を情けなく感じ、みじめでした。しかし決して投げ出さず、厚かましくしがみついて行く中で、彼らの思考のプロセスや、レポート作成のノウハウ、そして発表のテクニックなどを少しずつ習得できたと思います。そしてその内容はともかく、ついにはみんなと協力して2、3のレポートを作成することができたのは、自分としてはとても満足しています。このときはまさに必死でした。

毎回、10冊ほどの参考資料に、英和・和英辞書、仏和・和仏辞書を総動員して、数日間徹夜もしてやっとのことで仕上げることができました。

苦労が大きかっただけに、出来上がったときの満足感もひとしおでした。留学中の1日1日には、このような辛い経験や、あるいはもちろん楽しい思い出がいっぱい凝縮しています。そして、それらの経験を通して日々私が思ったこと、考えたことは、これからの私に大きな影響を与えると思われ、私自身もこの経験を活用できるように頑張っていきたいと思います。

ドイツ派遣学生

商学部経営学科 4年
鬼丸　敦

ドイツの学生達と

私がドイツで2ケ月間滞在し勉強した場所は、ラインランド・プファルツ州のルードヴィヒスハーフェンというドイツの3大化学メーカーのひとつBASFの本社がある地方工業都市でした。工業都市にもかかわらずその街並はたいへん美しく、静かな町で、勉強するにも、生活するにもたいへん快適な環境でした。

そこでこのドイツ留学を通じて、最も日本と違うと感じた教育システムを紹介したいと思います。なぜなら最近日本で教育改革が声高に叫ばれているにもかかわらず、依然として偏差値教育は存続しており、日本の大学のレジャーランド化が進む一方だからです。

ドイツの教育システムは日本とも、またアメリカとも違っています。ドイツで高等教育を受ける場合、それ以前に、日本より1年間その期間が長い13年間の教育を受ける必要があります。しかし、誰もがその13年間すべての教育期間を受けられるわけではありません。1年生から3年生までは普通に教育を受けられますが、4年生を過ぎるとそのシステムが変わってきます。まず4年生以上の学年になると、勉強が出来ないと容赦なく落とされます。つまり落第です。日本のように9年間は順調にあがっていくことは出来ず、勉強が出来ないと実業高校レベルもしくは中学校レベルの教育までしか受けられないのです。だからこの13年間を終了することはかなりの価値があり、またこの過程が出来ていないと大学へ入ることが出来ません。一見厳しいシステムであるかのようですが、ほとんどの学生は自分の進みたい進路をこの13年間の内に決めています。ただなんの目的もなく大学へ進学する日本の学生とは明らかに違います。またドイツの学生でこの13年間を終了してすぐに大学で勉強を始めるということはまずありません。一度社会に出て経験を積んで、そこで自分に足りない能力を補うために大学で勉強をします。だから日本の学生と比べると勉強に対する取り組み方が全く違います。もともとドイツ人は勤勉であるとよく言われますが、授業に対する取り組み方、家での勉強の量をみると驚くほどです。

このようなドイツの教育システムと、目的を持って勉強するドイツの大学生に接することが出来たことは、自分の大学生活を見直すよい機会となりました。

最後に、短期派遣留学となると旅行感覚で応募してしまう人が多いように思われます。しかし、留学に意義を持たせるためにも、はっきりとした目的を持って留学してほしいと思います。

新疆ウイグル自治区にて

中国 派遣学生

経済学部国際経済学科 4年
角居　典枝

95年2月、私は長期交換留学生として深圳を訪れた。今回深圳に来るのは2度目だったのだが、羅湖駅を出た瞬間のあの言葉にしがたい中国的な雰囲気はやはり新鮮に感じられ、中国に来たことをしみじみ実感させられた。けたたましい車のクラクション、土埃り、天びん棒をかついだ物売りの子供達、どちらを向いても人ばかりで、どこから湧いて出てくるのだろうと思わせるほどだ。そして高層ビルに高級車。深圳はアンバランスで、どことなく不思議な街である。この時私は一年間ここで生活できるのかと思うだけで、不安というよりも嬉しさでいっぱいだった。

3月より授業がスタートしたが、やはり最初の3～4ケ月はとまどいの連続だった。先生や友人の話が少しも理解できないのだ。一度などは、冗談を言われて理解できず、ジョークよと言われたことすらもわからなかった。とにかく恥しかった。しかし今思えば、恥をかいたぶん得るものも大きかったと思う。

夏休みには、シルクロード、北京、上海等を旅行した。西安から列車で58時間、様々な都市を抜け、砂漠を越えて行き着くのが新疆ウイグル自治区である。車窓からの景色はそれは素晴らしい。特に万里の長城最西端の砦、嘉峪関から延びた長城が、風化され砂漠に埋もれていく様は言葉には言い表せない程素晴らしかった。油田の街にも立ち寄り、地表からしみ出る原油に触れて、自然のすごさというものを改めて実感した。そしてまた、列車の中での中国人との交流も旅を楽しくさせてくれた。この5週間の旅行は留学生活の中で最も貴重な思い出となるだろう。

深圳という街は今現在、とてつもないスピードで変化している。あちらこちらに高層ビルが建ち、ゴルフ場やレジャー施設等の建設もさかんだ。インフラ整備も進められており、昨年と比べただけでもかなり住みよくなったと思う。蛇口工業区としてスタートした一帯も高級リゾートの建設やマンション建設が進み、又、香港～蛇口間の地下鉄工事も既に着工されており、21世紀には深圳は香港のベッドタウンと化すだろう。

この様に、深圳という街は本当に生きているという感じを受ける。それに自分もおいていかれないように努力しなければならない。自然に視野が広がり、中国一国にとどまらず、アジア各国にまで興味がわいて来るようになる。今まで何も感じていなかった日本という国がいかに豊かな国であったのか、ということにも外から見て初めて気が付くことだろう。

留学はぐーんと視野を広げることができる。私は今回深圳に留学できて本当によかったと思う。世界をより知るうえでも、日本という国を再認識するうえでも、留学というものを多くの人に経験してもらいたい。

韓国 派遣学生

外国語学部東アジア学科 2年
渡邊　潤

店の前に、催涙弾が打ち込まれた。店内に逃げ込むデモ隊。パニックに陥る客ら。そして沈黙。うっすらと霞む店内は、気付くと私と二人の女性だけ。他の客は上の階へ逃げたらしい。突然の事で呆気に取られていたら、催涙ガスが襲ってきた。呼吸ができない。目が開けられない。それに、すごい刺激臭までも。人間の戦意を喪失させる目的なら、ノーベル賞並の威力だった。

まるで映画か何かを思わせるが、これは実際に私が体験した一コマである。たいくつな日本を飛び出したくて応募した交換留学。その韓国での留学生活も残り一ケ月となった。

この一年は、大好きなブルーのエアーナイキを足に、突っ走り、そして倒れ込み、立ち止まり、また走り出した、そんな感じの一年だった。来た当初から韓国語を器用に話す中国の交換留学生相手に猛勉強した日々。体をこわした一ケ月。友人と旅行を楽しんだ夏休み。そして、何もかもにやる気を失った時期。

外国での留学生活とは、案外、地味なものであると思う。最初は物珍しかった事も、いずれ生活の一部となってしまい、また、時折襲ってくる孤独感とも戦わなけれ

交換留学(派遣)

学年は平成8年3月現在

学生寮の友達と
(筆者は右端)

ばいけないからだ。しかし、そんな私を支えてくれたのは、やはり韓国の友人であり、大学の先生方であった。

忘れられないことがある。

韓国へ来て間もなく、高熱を出し、二週間程ベットの上で過ごした時期があった。韓国の食べ物が口に合わず、口にする物と言えばヨーグルトだけだった。そんな私を見かねて、寄宿舎の先生は何度も私の部屋まで足を運んでくれ、そして、私が食事をしていないのを知ると、雨の中、市場まで行って、果物を山のように買ってきてくださったのだ。韓国語も十分に理解できなかったその時期、韓国の人の優しさに触れ、涙が出る思いだった。

個人主義が浸透してきたせいか、機械化が進んできたためか、日本では、感じる機会が少なくなった人間の情のようなものに、私は韓国で幾度となく感動させられた。

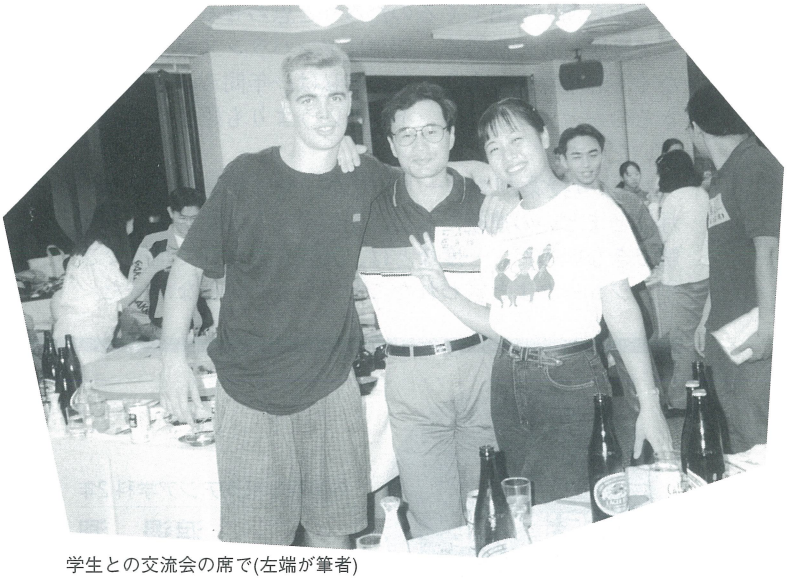
韓国語を専攻する私にとって、この留学は確かに語学力の向上にもつながった。しかし、学んだ事はそれだけではなかったようだ。

なんだか、よくありそうな結論に落ち着いたが、最後に、この一年お世話になった方々に心より感謝し、その倍ぐらいいると思われる迷惑をかけた方々に心より謝罪したいと思う。

交換留学(受入)

アメリカより受入学生

キャロル大学
パトリック・キーン



学生との交流会の席で(左端が筆者)

私はアメリカからの留学生です。一昨年の9月に日本に来ました。その時以来、たくさんのことを勉強しました。日本語だけではなくて、世界のいろいろな事も勉強しました。例えば、いろいろな国の人口や地理など他の留学生たちからもたくさん習いました。本当に世界のどこへでも行きたくなりました。他の留学生たちが、私の夢を築くのを手伝ってくれますので、今では私の夢は前より近くなったように見えます。今、私の考えている事は卒業してからどうするかです。もっと日本語を勉強したいけれど、お金と時間があるかどうかが問題です。今私の専攻は心理学と国際問題です。卒業してからすぐはまだ働きたくないです。旅行もしたいし、他の言葉を話せるようになりたいです。

日本に来て初めから本当に運がよかったです。私のルームメイトは源島大介さんでした。彼にはたくさん知り合いがいます。私はいろいろな人に紹介して貰いました。たくさんの友達が早く出来ました。このように周りの人が私にたくさん手伝ってくれました。

また、他の留学生たちが本当に好きです。イギリス人たちはとても面白いです。彼女たちはよくヨーロッパの事を教えてくれます。世界の一番きれいな所だと何回も聞いた事があります。カロリーナもとてもいい人だと私

は思います。少しスペイン語を教えてもらいました。気が重い時、彼女と話すと希望がわいてきます。彼女は英語が上手なので（彼女が）アメリカ人じゃない事をよく忘れるほどです。ドイツ人の留学生たちはとても勤勉な人々だと分かるようになりました。クレメンズはとても模範的な人ですよ。この人たちのおかげで、私の人生の目的が見えるようになりました。私はキャロル大学を卒業するためモンタナへ帰らなければなりません。その後のことはまだ分からないけど、今はもしがんばれば何でも出来るという事が分かるようになりました。

ドイツより受入学生

ラインランド・プファルツ州立経済大学

クレメンス・ジーグファンツ
シモーネ・トムセン
シュテファン・トライアー
グレゴア・シュマルツ
（写真左から）

1994年9月から6ケ月間、私たちは熊本で交換留学生として日本の学生生活を経験することができました。日本に着いたときは全然日本語がわかりませんでしたので、カルチャーショックを受ける危険がとても大きかったのです。でも国際交流センターのおかげで、心配なく学生生活を送ることができました。熊本学園大学の図書館などのすばらしい設備にはびっくりしました。自転車置き場にまで管理の人がいましたが、これはドイツにないのでおもしろいと思いました。またドイツと違って、女の人が夜遅くでも一人でサイクリングをしたりできることもうれしいことでした。

大学では、外国人のための日本語の授業や英語の授業を受けました。日本語の時間は、日本語の学生といっしょにいろいろなテーマで討論をすることができてとても勉強になりました。福山先生や平井先生が、ドイツから来たヘンな学生を相手に辛抱強く教えて下さったことにはとても感謝しています。

みんなでコンパや忘年会に行ったことは忘れられません。マスデン先生の授業もすばらしかったですが、もっとすばらしいには先生の歌だということが忘年会でわかりました。

熊本の町も熊本城や水前寺公園があり住みやすいし、9月のドーカイ・ドーカイ祭はすごかったです。また熊本の人も親切で、食べ物もとてもおいしいです。からしれんこんは私たちの一番好きな食べ物になりました。ドイツに帰ってからも、日本がとてもなつかしいです。でも熊本からホストファミリーの方や、センターの園田さん、日本人の留学生が来てくれましたからさびしくありません。

1996年の2月に、学園大学から5人の留学生がドイツに来るそうですから、私たちは日独交流の友情の橋になりたいと思います。

センターのみなさん、本当にいろいろとありがとうございました。熊本は、今でも私たちのホームタウンです。

イギリスより受入学生

リバプールジョンモーズ大学

ケリー・ウェアリング

今まで私はイギリス、フランス、オーストラリアとニュージーランドに住んだことがありました。その他、世界の中で旅行のためにいろいろな面白い所へ行きましたが、日本ほど面白い経験をしたことはないと思います。

日本に来る前に日本の生活について全く分かりませんでした。その時、日本語があまり話せなかったし、日本の文化と社会もはっきり分かりませんでした。日本に来て以来、予想通り日本の生活は面白くてい

いと思います。例えば、日本にはどこにでもステキな神社や城や温泉などがあります。普通の家でもイギリスと比べて違うと思います。イギリスでは靴のまま家に入ってもいいです。そして、畳や炬燵や布団などがありません。けれども、近ごろ若者は日本の製品を買っています。漫画とか布団とか日本料理も人気が出てきました。

学生として熊本に住んでいるのは大好きです。やっぱり皆は元気で毎週末バーやパーティーに行くのを楽しみます。イギリスには、週末に大学生たちは皆バーで飲んだり、バソドを聞きに行ったり、映画を見たりします。キャンパスの中にバーがあって、皆はそこによく集まります。

私の日本にいる友達はほとんど日本人だから毎日日本語で話さなければなりません。バーに行くと酔っ払っても日本語で話します。その時はなんとなくもっと簡単に話せるような気がします。

日本の生活はイギリスと比べてあまり違わないと思います。物価やビールの値段は高いのですが、手が出ない程だとは思えません。

私は去年留学生として学園大学で勉強しました。その経験はすごかったので、もう一年日本に住むことにしました。そういうわけでこの学園で国際交流センターの皆様に日本の大学生活を紹介されました。いろいろな行事に行かせていただきました。とても楽しい経験でした。学園でたくさんの友達を作ったり、皆と一緒にいくつものパーティーをしたりしました。

今、イギリスの大学を休学して日本語の勉強を続けたいので、YMCAで勉強しています。日本に住んでいるのはそんなに楽しくて、イギリスに帰りたくないほどです。

国際交流センターで
(前列:花を抱えているのが筆者)

中国より受入学生

深圳大学
刘 華 端

正門の銀杏並木の葉がすっかり落ちてしまいました。私が中国から着いたその日の銀杏並木も葉がありませんでした。木々が芽をふき、葉をつけ、実を結び、黄金色に染まり、落葉し、地面を黄色の葉で埋めました。裸の木々は私に許された四分の三の時間が過ぎ去ったことを告げています。

この9ケ月の間いろいろな体験をしました。日本の美しい自然、きれいな町並み、快適で便利な暮らし、人々の優しい気遣い、様々なことが心に浮かんでは消えていきます。

外国に行くのがはじめての私は、飛行機の中で未知の土地での生活を考えるととても不安でした。福岡空港に着き、迎えに来て下さった切通さんと車に乗って話をするうちに不安は少しづつ消えていきました。アパートに着くと、食べ物も冷蔵庫に用意され、行き届いた配慮に感心しました。そのときからずっと国際交流センターの方々の親切は変わらず続いています。講義の選び方から、ランプの修理まで困ったことは何でも相談できました。苺狩りや菊池渓谷につれていって下さったこともあります。心から感謝しています。

学園大の学生も授業に必要な教科書を貸してくれたり、漢字の読みや日本語の意味が分からないときには丁寧に教えてくれました。私は沢山の講義をとりましたが、日本語がまだ十分でなかったので、とても助かりました。アパートに帰っても、近所の郵

託麻祭の市内パレードで茶道部の友達と
(右から2人目が筆者)

便局の人やスーパーのおばさんたちが私の顔を覚えてくれて、いつも親切にしてくれます。

学園大はサークル活動がとても盛んだと思います。私は茶道部に参加しました。お茶会や託麻祭等の活動に加わり、日本の伝統文化の一面に触れることができました。さらに一つの目標に向かって、みんなが日曜日まで出てきて、自然な形で一緒に作業する姿は、不思議に思いました。でもこのことは日本人を理解する上でとても役に立ちました。

大学や市のイベントを通じ、日本人だけでなく様々な国の人とも出会うことが出来ました。他の国から来た人たちとの交流を通じ、私の目は中国から日本へ、そして世界へと広がっていきました。これは私にとって望外の喜びでした。

この一年間日本のいろいろなところを訪れ、友達も沢山出来ました。でも私は3月の末にもう日本を離れます。いつか黄金色に染まった美しい銀杏並木を見られる日がまた来ることを祈っています。

韓国より受入学生

大田大学校
李 銀 娥

火の国祭にて

「暑か」という言葉が無意識のうちに出てしまう今年の夏だった。熊本の暑さは留学前からそのうわさを聞いていたので、心の準備をしていたのだが、それでも考えていたものとは違っていた熊本の暑さだった。

私はそんな熊本の暑さを避けて、8月19日から8月28日までの間、神戸ボランティアに参加した。大震災があってから半年以上経った頃だったので、状況は少しは良くなっていた。

あまり上手ではない日本語のせいで、多少の失敗もあったし、理想的なボランティア活動があまりできなかったような気がする。その中でも、朝のトイレ掃除、盆踊りの準備作業は今も記憶に残る楽しい活動だった。

10日間のボランティア活動は、個人的に関西を好きになるきっかけになって、結局、11月には一人で関西（大阪、京都、奈良）に旅に出るまでになった。日本に来て、私はいわゆる外国人の友達（私から見た時の外国人）が出来たし、私自身も外国人になってしまった。そしてそうした友達と会う中で、私自身が持っていた先入観や固定観念に今更のように驚いた。

自己紹介してからは、相手の国籍に応じて私なりのイメージで相手のことを考えてみた。「あー。ではこの人はこういう人なのであろう。」という考えが無意識のうちに浮かんだ。

直接体験できなかったことについての話を、人から聞いたり教えられたり本を通じて知ったりというような間接的な体験は重要だ。しかし、そういう間接的な体験が他の国の文化や人々に対する固定観念に影響を与えて、新しいものを受け入れるときの障害になってはいけないと思う。

本を通じて得た、そして学校で教わった知識だけが実力だと思っていた私にとって、日本での8ケ月は本当に貴重な時間だった。「地球村」とか「無限競争時代」という言葉を口にしながら、どんどん狭くなる世界の中で、私は自分がいかに「井の中の蛙」のような考えをしていたかということに気がついた。

最近、よく言われる言葉の中の一つに「世界化、国際化」というものがある。結局この「世界化、国際化」ということも、自分の位置を正確に理解することから始まるのではないだろうか。

韓国の中で自分を見る視点と、外から見る視点には大きな差がある。差があるのは、もちろん自分のことだけではなくて、国に関してもそうだ。世界の若者と一緒に肩を並べられる実力、そして心の豊かさ。誰かが言った通り“世界は広くて、するべきことは多い。”

人間交流としての国際化
—外国人留学生弁論大会に臨んで—

熊本学園大学講師　吉永　心一

11月18日、国際交流委員会主催の「第5回外国人留学生弁論大会」が、学内外の関係者及び多くの学生の参加の下で開かれた。13人の留学生の方々によって、日本に対する様々な思いが、時にはユーモアたっぷりに、時には批判の意味を込めて語られ、留学生の方々はもちろん、参加された方々にとっても、留学生の“生の声”に触れることができたという意味で有意義な時間であったように感じられた。

留学生の方々から紹介される話は、ほとんどが今の日本社会で当然と考えられている習慣、風習、文化などに対する素朴な疑問にまつわるものであった。「お酒と本音」の刘さんや「私が感じた日本の特徴」の陳さんらによる“酒”文化というものに対する疑問、「私にとっての会話の問題」のヴァネッサさんや「日本に来て」の李さんらによる“日本語”という言葉に対する戸惑い、さらに「戦争の被害は何時までつづく」の楊さんによる日本の戦争責任に対する不信感など、私たちが見過ごしがちな事柄に対して鋭い指摘をされており、国際交流という華やかな言葉の裏では、様々な偏見・誤解が生じていることを痛感した。

「私が考えている国際化と国際人」で辛さんが主張されていたように、国際化とは、単に派遣・受入れ人員の増大などの交流規模の問題に集約されるものではなく、実際に国際交流に参加する場合も、言葉の習得や異文化体験のみにその目的があるわけでもないであろう。国際化に際しては、交流の担い手である人間同士の交流が図られることが大切である。つまり、留学生と日本人という関係ではなく、人間対人間の関係として交流を深めていくことが、最終的な国際化につながるのではないかという印象を強く受けた。

ただ、日本の中では民族問題、性差別、学歴偏重主義、部落問題などの様々な問題が解決されないまま残っており、“人権”問題について、日本という国が世界的にみて“後進国”であるという感は否めない。「偏見」の中で文さんが指摘されていたように、“外国人”という感覚ではなく、相手も自分と同じ“一人の人間”であるという意識をしっかり持つことが求められているように感じられた。

今回の弁論大会に臨んで一番強く感じた点は、“人間”や“人権”というものに対して、留学生の方々が実に優しくかつ厳しい視点をもっているということである。人権後進国としての日本が、まず人権意識を国際化させていくことが、真の国際化への第一歩であるのかもしれない。

今回で5回目を迎えた「外国人留学生弁論大会」が、国際交流委員会及び関係者の方々の尽力の下、今後もいっそう発展していくことを願うと共に、外国人留学生と日本人という形ではなく、同じ人間同士の交流という形での“人間交流”が、多くの国々の留学生の方々との間で繰り広げられていくことを心から願ってやまない。

熊本学園大学国際交流委員会主催

第5回　外国人留学生弁論大会 結果

賞	弁論テーマ	名前
★最優秀賞	お酒と本音	刘华端　ﾘｭｳ ﾎﾜﾄﾞｳﾜﾝ
★優秀賞	日本に来て	李銀娥　ｲｳﾝｱ
	日本と国際化	スーザン・アレン
★特別賞	私が感じた日本の特徴	陳宏孟　ﾁﾝ ｺｳ ﾓｳ
	新しい文化を作りましょう	刘若瑜　ﾘｭｳ ﾙｵ ﾕｲ
★努力賞	私にとっての会話の問題	ヴァネッサ　コクショール
	私が考えている国際化と国際人	辛允貞　ｼﾝ ﾕﾝ ｼﾞｮﾝ
	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝの輪を広げるために	呉霄宇　ｺﾞ ｼｮｳｳ
	偏見	文勝龍　ﾌﾞﾝ ｼｮｳ ﾘｮｳ
	戦争の被害は何時までつづく	楊兆利　ﾖｳ ﾁｮｳ ﾘ
★奨励賞	日本人	何兆斌　ｶ ﾁｮｳ ﾋﾝ
	日本の会社での女性の役割	サマンサ　モーズ
審査委員特別賞	人間	李　勤　ﾘｷﾝ

着実に交流が深まっている「スポーツ交流会」

本学ではこの数年100名を越える留学生が在籍し、キャンパスには中国・韓国などのアジアからの留学生やアメリカ・イギリスなどからの欧米からの留学生の姿が多く見られるようになり、ますます学生レベルでの交流の充実が重要になってきている。明確な修学目的をもって入学する留学生に本学学生が出

会い、本学学生は留学生の学習に対する真摯な態度に触れ、知的刺激を受け、国際感覚を学ぶことは、国際理解教育からも大変重要である。キャンパス内での留学生と本学学生との交流の機会としては、留学生が課外活動（サークル）に参加すること等があるが、大半の留学生は経済的事情により授業終了後、アルバイトに出かけることが多いので、様々な交流の機会を持つことは容易ではないようである。

このような中で、第一部学生自治会学生議会は留学生と本学学生との交流の機会を作るため、昨年より10月にスポーツ交流会を計画、実施している。スポーツ交流を通して、留学生と本学学生との友情が芽生え、着実に交流が深まっている。学生レベルでの交流が更に充実するよう今後もスポーツ交流会が実施されることを期待している。

第1回国際交流に関するアンケート調査実施

本学の国際交流活動は10数年を経て、欧米、アジアの各国にひろがる姉妹大学のネットワークを築き、交流プログラムによる教員、学生の相互往来も年々活発になってきている。国際交流のプログラムをさらに充実させ、国際交流をより進展させていくために、幅広い学生の意見を聞き入れ、そして学生諸君に国際交流プログラムに対してさらに大きな関心をもってもらうことが必要不可決のことである。以上の問題関心から国際交流センターが全学部・学科の学生を対象に本学の国際交流に関する初めての意識調査を行った。

アンケート調査は1994年6月から7月にかけて実施した。全学生数の約10％に相当する859人から有効回答があった。

今回のアンケートでは、海外への関心度、交流プログラム、留学生との交流、国際交流センターの利用、という4つの柱をもうけて調査した。

「機会があれば海外へ行ってみたいか」という問いにたいして、90.3％の学生が「行きたい」と回答している。その目的は「観光」83.7％、「語学研修」30.5％、「留学」24.8％、「ゼミ研修」7.6％となっている。「留学」、「語学研修」については外国語学部の英米学科は55.4％と65.2％、東アジア学科は40.7％と70.4％、経済学部の国際経済学科は26.7％と43.3％の学生が希望しており、その他の学部・学科においても20％を超える数値が出ている。留学や研修に対する本学学生の関心と潜在需要の高さがうかがえる。

本学の国際交流プログラムについては、「知っている」と回答した学生は全体の45.5％を占めている。プログラムの浸透度が高いのは国際経済学科で67.7％、つづいて英米学科67％、東アジア学科66.1％となっている。

その他、留学生との交流については、「話したことがある」と回答した学生は273人で全体の31.8％を占めている。80％の学生が「留学生に会う機会がない」、65.4％の学生が「国際交流センターの場所を知らない」と回答しており、これは学内の国際交流を進めていく上で注目に値するものである。

このアンケート調査を通じて、本学の学生の国際交流に関する意識や考え方のおよその傾向を掴むことができ、今後の国際交流を進めていく上での貴重な資料になるものと思われる。

〔国際交流に関するアンケートより〕

Q. 海外に行ったことがありますか。

・行ったことがある	167人（19.4％）
・行ったことがない	689人（80.2％）
・無回答	3人（0.3％）

Q. どういう目的でしたか。

・観光	112人（66.3％）
・留学	16人（9.5％）
・語学研修	32人（18.9％）
・ゼミ研修	23人（13.6％）
・留学生など友人に会うため	7人（4.1％）

Q. 本学の留学生と話したことがありますか。

・留学生と話したことがある	273人（31.8％）
・留学生と話したことがない	582人（67.8％）
・無回答	4人（0.5％）

Q. どんなきっかけで本学の留学生と話しましたか。

・演習	45人（16.2％）
・講義	62人（22.4％）
・サークル活動	67人（24.2％）
・友人、先生の紹介	60人（217％）
・その他	81人（29.2％）
・無回答	5人（1.8％）

Q. なぜ留学生と話したことがありませんか。

・留学生に関心がない	30人（5.1％）
・留学生に会う機会がない	469人（80.0％）
・語学力等の理由で話すのが不安	53人（9.0％）
・その他	29人（4.9％）
・無回答	5人（0.9％）

第1回
留学生生活実態調査実施

平成6年11月24日～12月24日の間において、国際交流センターと学生部が中心になって組織した留学生生活実態調査実行委員会によって、本学全留学生を対象にした第1回目の生活実態調査が行われた。

調査は「本学留学生の生活実態をできるかぎり正確に把握するとともに、留学生の生活を充実させ、楽しく豊かに送れるための基礎資料を得ることを目的」とし、5分野で35の質問について行われた。主な調査内容と項目は次の通りである。（A）基本事項（4項目）：性別、年齢、在籍身分、出身国・地域。（B）留学目的（6項目）：留学目的・理由、本学を知った方法、選んだ理由、留学後の進路など。（C）生活実態（19項目）：住居、生活費、奨学金、健康、交通など。（D）適応（4項目）：困っていること、相談先、日本語の理解程度、授業内容。（E）その他（2項目）：日本人の友達、サークル活動。調査の最後に自由記述の項を設け、留学生に自由に意見を述べてもらっている。

この調査をベースにした『留学生生活実態調査報告書』（平成7年3月）が作成・発行された。これは本学の国際交流における初めての試みであった。

報告書は「まえがき」、「調査の概要」、「留学生生活実態調査・分析結果」、「あとがき」と資料によって構成されている。「調査の概要」においては調査の目的、調査の対象、調査の方法、調査の内容と項目などを中心に説明し、回収状況について報告している。「留学生生活実態調査・分析結果」においては上述した調査内容と項目ごとについて詳細に集計・叙述したうえで、全体の調査結果に対する調査委員会の評価も述べている。

【留学生生活実態調査より】

Q.熊本学園大学に日本人の友達がいますか。

・いる	38人（61.3%）
・いない	23人（37.1%）
・不明	1人（1.6%）

Q.その友だちは次のどれですか。

・同じクラスの人	12人（30.8%）
・同じ学年の人	14人（35.9%）
・クラブなどの先輩、友人	5人（12.8%）
・その他	4人（10.3%）
・不明	4人（10.3%）

Q.その友だちとどのようにつき合っていますか。

・学内だけ一緒にいる	19人（48.7%）
・学外でも一緒にいる	16人（41.0%）
・不明	4人（10.3%）

Q.日本人の友だちがいない人は、その原因は主として次のどれだと思いますか。3つ以内で選んでください。

・忙しすぎて付き合う時間がない	9人（39.1%）
・日本人同志で固まっているから	9人（39.1%）
・日本人が関心を持ってくれないから	8人（34.8%）
・人と付き合うのが下手だから	7人（30.4%）
・日本人の差別意識が気になるから	6人（26.1%）
・日本語でうまく会話ができない	5人（21.7%）
・その他	5人（21.7%）
・留学生の友人だけで十分であるから	3人（13.0%）
・話題、関心について行けない	3人（13.0%）

今回の調査では、本学留学生の勉学と日常生活の実態についての貴重なデータを得ることができた。報告書を読む限り、留学生の日常生活は必ずしも快適で、充実した生活環境にあるとは言いがたい。アジアからの留学生が絶対的なシェアを占めているため、経済的な問題に頭を悩ませている学生が少なくない。困った時の相談相手や方法も確固としたものではない。

今回の調査の結果と意義について、国際交流委員会勝部伸夫委員長が次のように述べている。「今回のアンケートで得られたデータはそれ自体まずは素直に受けとめられねばならない。そして今後の留学生への対応やサービスの向上に生かされねばならないことはいうまでもない。そうすることによってのみアンケートを実施したことの意味がでてこよう。…何れにしろ、留学生たちが置かれた環境が如何なるものか正しく把握し、大学として何ができ、また何をすべきか検討していくための第一歩にこの調査がなったとすれば幸せである」。

DATA

1995年度　出身国（地域）別外国人留学生数

（12月6日現在）

国名または地域名	学部・学科留学生 大学 1	2	3	4	短大部 1	2	合計	研究留学生 大	短	合計	大学院生 1	2	合計	交換留学生	合計
中国	5	8	2	11		1	27名	10	—	10名	6	4	10名	2名	49名
台湾			1	2			3名		—		1		1名		4名
韓国				2			2名	2	—	2名		1	1名	4名	9名
インド									—			1	1名		1名
イギリス									—					2名	2名
アメリカ									—					5名	5名
オーストラリア				1			1名		—						1名
合計	5	8	3	16		1	33名	12	—	12名	7	6	13名	13名	71名

1.　学部留学生・学科留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	吳　琼（ゴ ジョン）	女性	中国	商・商1年
2	赵　英　伟（チョウ エイ イ）	男性	中国	商・商1年
3	李　奕　茜（リ エキ セイ）	女性	中国	商・経営1年
4	馬　秋　紅（マ チュウ ホン）	女性	中国	商・経営1年
5	程　菱（テイ リョウ）	女性	中国	経済・経済1年
6	何　兆　斌（カ チョウ ヒン）	男性	中国	商・商2年
7	顧　建　勲（コ ケン クン）	男性	中国	商・商2年
8	劉　凱　玲（リュウ ガイ レイ）	女性	中国	商・商2年
9	呉　霄　宇（ゴ ショウ ウ）	男性	中国	商・経営2年
10	李　競（リ キョウ）	男性	中国	商・経営2年
11	張　衛　琼（チョウ エイ ケイ）	女性	中国	経済・経済2年
12	黄　益　培（コー エキ ペイ）	男性	中国	経済・国経2年
13	任　佳（ニン ケイ）	女性	中国	経済・国経2年
14	黄　丹　倩（コウ タン セイ）	女性	中国	短・保2年
15	邱　鴻　淳（キュウ コウ ジュン）	男性	台湾	商・経営3年
16	楊　軍（ヨウ グン）	女性	中国	商・経営3年
17	何　成　雨（カ セイ ウ）	男性	中国	経済・国経3年
18	林　木　鳳（リン モク ホウ）	女性	中国	商・商4年
19	権　奇　雲（ケン キ ウン）	男性	韓国	商・経営4年
20	廖　柏　明（リョウ ハク メイ）	男性	中国	商・経営4年
21	楊　思　睿（ヤン スー ルイ）	男性	中国	商・経営4年
22	梁　湖　南（ヤン ホー ナム）	女性	韓国	商・経営4年
23	王　建　平（オウ ケン ペイ）	男性	中国	経済・経済4年
24	廖　誌　武（リョウ シ ブ）	男性	台湾	経済・経済4年
25	沈　默（チン モク）	男性	中国	経済・経済4年
26	SUSAN ALLEN（スーザン・アレン）	女性	オーストラリア	経済・国経4年
27	陳　瑞　君（チエン ルイ ジン）	女性	台湾	経済・国経4年
28	林　瀚（リン ハン）	男性	中国	経済・国経4年
29	陸　兵（リク ヘイ）	男性	中国	経済・国経4年
30	刘　毅（リュウ イ）	男性	中国	経済・国経4年
31	姚　鑠（ヨウ リキ）	男性	中国	商・商4年
32	楊　兆　利（ヨウ チョウ リ）	男性	中国	商・経営4年
33	李　剛　剛（リ コウ ゴウ）	男性	中国	商・経営4年

2.　学部研究留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	許　春　花（キョ シュン カ）	女性	中国	商・商
2	巖　笑　麗（ゲン ショウ レイ）	女性	中国	商・商
3	呂　新　跃（ロ シン ヨウ）	男性	中国	商・商
4	孫　鐘　億（ソン ジョン オク）	男性	韓国	商・商
5	華　沢　明（カ タク メイ）	男性	中国	商・商
6	張　蓉　霞（ジャン ロン シア）	女性	中国	商・商
7	宗　玮（ソウ イ）	男性	中国	商・経営
8	華　建　明（カ ケン メイ）	男性	中国	商・経営
9	殷　紅（イン コウ）	女性	中国	商・経営
10	潘　丹　慧（パン タン ケイ）	女性	中国	経・経済
11	侯　尽　霞（コウ ホウ シャ）	女性	中国	経・経済
12	榮　林（エイ リン）	男性	中国	経・国経
13	李　守　陳（イ スウ チン）	女性	韓国	社会福祉
14	潘　丹　敏（パン タン ビン）	女性	中国	社会福祉

3.　大学院生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	李　勤（リ キン）	男性	中国	院・商学1年
2	王　念　海（オウ ネン カイ）	男性	中国	院・経営学1年
3	金　春　奉（キン シュン ホウ）	男性	中国	院・経営学1年
4	文　勝　龍（ブン ショウ リュウ）	男性	中国	院・経営学1年
5	曲　家　岩（キョク カ ガン）	男性	中国	院・経済学1年
6	陳　宏　孟（チン コウ モ）	男性	台湾	院・経済学1年
7	方　志　华（ホウ シ カ）	男性	中国	院・経済学1年
8	張　明（チョウ メイ）	女性	中国	院・商学2年
9	韓　相　倫（ハン サン ユン）	男性	韓国	院・商学2年
10	蔡　強　善（サイ キョウ ゼン）	男性	中国	院・経営学2年
11	盛　永　倹（セイ エイ ケン）	男性	中国	院・経営学2年
12	宗　目　瀾（ソウ モク ラン）	男性	中国	院・経営学2年
13	MISHRA MANISH KUMAR（ミシュラ マニッシュ K）	男性	インド	院・経営学2年

4. 交換留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	Andy Heltborg アンディ ヘルトボーク	男性	アメリカ	経営3年
2	David Robbin ディビッド ロビン	男性	アメリカ	経営3年
3	Ken Gilmer ケン ギルマー	男性	アメリカ	国経3年
4	Daniel B. Shea ダニエル B. シェイ	男性	アメリカ	外英米2年
5	刘 若 瑜 リュウ ルオ ユイ	女性	中国	国経4年
6	刘 华 端 リュウ ホア ドゥワン	女性	中国	国経4年
7	辛 允 貞 シン ユン ジョン	女性	韓国	経済4年
8	崔 秀 芝 チェ ス ジ	女性	韓国	東2年
9	李 銀 娥 イ ウン ア	女性	韓国	外東2年
10	黄 淳 英 ホワン スン ヨン	女性	韓国	経営3年
11	Samantha Moores サマンサ モーズ	女性	イギリス	経済3年
12	Vanessa Coxshall ヴァネッサ コクショール	女性	イギリス	商3年

5. サンアントニオ市派遣留学生

NO	氏名	性別	国籍	学籍
1	Laura Y. Garcia ローラ Y. ガルシア	女性	アメリカ	国経

本学留学生への交流の主な案内（1995年度）

名称	主催	内容	期日	備考
留学生の会	熊本YWCA	日本の家庭紹介各自行事への案内	年間を通じ随時入会申込み受付	
第8回留学生交流会	熊本県・大分県ロータアクト	ゲーム等を通じての交流会	5/14	15名参加
第8回県内留学生との交流会	熊本県立大学学生国際交流委員会	人吉研修旅行ディスカッションやレクレーション	7/12～13	2名参加
食文化国際交流	小川町	交流会や農業体験御国自慢料理披露	6/25	6名参加
国際理解教育等の活動	河内小学校	自国の文化・習慣・言葉等の紹介	7/1	イギリス
水俣国際親善競り舟大会	水俣市	大会出場・ホームステイ	7/29～7/31	16名参加
北海道・国際交流のつどい	北海道国際交流センター	夏期休業中のホームステイ	8/19～9/3	6名参加
火の国まつり	熊本市		8/12	多数参加
こども国際理解セミナー	財団法人熊本市国際交流振興事業団	熊本市国際交流会館落成1周年記念	9/9	中国
第13回九州在住外国人による日本語弁論大会	福岡YMCA	自由課題による日本語弁論大会	9/30	2名参加 王念海さん優勝
熊本国際交流祭典'95	熊本国際交流活性化連絡協議会	国際交流パネル展	10/7	留学生会
熊本国際交流祭典'95	熊本国際交流活性化連絡協議会	音楽に国境はない～留学生による歌	10/7	アメリカ、イギリス
熊本在住の留学生と懇談会	日本貿易振興協会熊本貿易情報センター	県内企業家との懇談会	10/11	21名参加
WORLD COMMUNICATION'95	熊本東郵便局	中高校生との交流会手紙の書き方等	10/14	15名参加国韓国
留学生とのスポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学学生とのゲーム形式のスポーツ交流	10/16	43名参加国
日本文化一日体験ツアー	財団法人熊本市国際交流振興事業団	陶芸 和菓子作り施設見学	11/25 12/3	
国際化・国際交流グルメフェスティバル	芦北ちいさな地球家族	料理作り施設見学	12/10	4名参加
中国映画会	熊本県日中友好協会青年部	中国人留学生へ無料で映画鑑賞	年間4回	多数
教養講演会での講話	五福公民館	公民館での一般市民向けの講演会	12/17—	
赤十字会高校生メンバーとの交歓会	日本赤十字社熊本県支部	1泊2日での高校生との交流会	12/25	
国際理解教育等の活動	力合小学校 大江小学校 楡木小学校 若葉小学校	自国の文化・習慣・言葉等の紹介		韓国・中国 中国 韓国・中国 韓国・中国
熊本市消防出初式	熊本市消防局	英語・中国による通訳有り	1/8	
留学生激励会	熊本南ロータリークラブ	ロータリー会員による留学生激励会	2/26	多数参加
春節の集い	熊本県日中協会	懇談と夕食会	2/16	11名参加
ユネスコ文化財を見る会	熊本県ユネスコ協会	ユネスコ会員と文化財見学を通し交流	3/10	6名参加
ロータリークラブとの交流会	熊本県下のロータリークラブ	講話と懇談会	随時	多数参加

1995年度・本学留学生の奨学金受給実績

★各種奨学金受給者数の合計

学部留学生	29	合計45名
学科留学生	1	
大学院生	12	
学部研究留学生	3	

（重複受給者と前年度からの継続受給者を含む実員）

★本学で扱った奨学金の受給状況

私費外国人留学生学習奨励費　（一般奨励費）

	推薦	採用
学部留学生	7	6
学科留学生	1	1
大学院生	2	2

熊本県外国人留学生奨学金

	応募	採用
学部留学生	24	5
学科留学生	0	0
大学院生	6	1
学部研究留学生	5	2

在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金

	応募	採用
学部留学生	14	4
大学院生	3	1
学部研究留学生	3	1

肥後銀行国際交流奨学金

	応募	採用
学部留学生	11	2
大学院生	1	0

平和中島財団外国人留学生奨学金

	応募	採用
学部留学生	6	0
大学院生	2	0

私費外国人留学生平和友好特別奨励費（特別奨励費）

	推薦	採用
学部留学生	6	6
学科留学生	1	0（応募なし）
大学院生	4	4

ロータリー寿崎奨学金

	応募	採用
学部留学生	21	5
学科留学生	1	0
大学院生	8	3
学部研究留学生	3	0

ロータリー米山記念奨学金

	応募	採用
学部留学生	2	0
大学院生	3	0

国内採用による国費外国人留学生

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	1	1

寿屋育英財団奨学金

	応募	採用
学部留学生	19	3
学部研究留学生	3	0
大学院生	6	0

Seminars

国際交流センター事務室主催

交換教員による教職員向け語学教室

1.韓国語会話クラス
講　師：尹一鉉先生（韓国・大田大学校）
開催日：1995年4月11日から1995年12月19日まで原則として火曜日
時　間：17：30〜18：30

2.中国語会話クラス（1）
講　師：王　洋先生（中国・深圳大学）
開催日：1995年4月13日から1995年7月6日まで原則として木曜日
時　間：17：30〜18：30

中国語会話クラス（2）
講　師：王　方先生（中国・深圳大学）
開催日：1995年10月12日から1995年12月21日まで原則として木曜日
時　間：17：30〜18：30

3.英語会話クラス（1）
講　師：リチャード・ロッシュ先生（米国・モンタナ州立大学）
開催日：1995年4月14日から1995年7月7日まで原則として金曜日
時　間：17：30〜18：30

英語会話クラス（2）
講　師：ケビン・リンゲンフェルター先生（米国・モンタナ州立大学）
開催日：1995年9月29日から1995年12月22日まで原則として金曜日
時　間：17：30〜18：30

※他にも研究所や学部等が主催する講演会等多数あり、詳細は省略。

国際交流委員会メンバー（敬称略）

1995年12月まで
国際交流委員長　勝部伸夫
国際交流委員
商学部　蔡剣波、吉永心一
経済学部　坂上智哉、朴哲洙
外国語学部　西　紀昭、堀　正広
社会福祉学部　篠崎正美、宮崎俊策
短期大学部　大塚信生、原田史郎
国際交流センター事務室　星子三郎、西村禮二

1996年4月〜
国際交流委員長　勝部伸夫
国際交流委員
商学部　蔡剣波、吉永心一
経済学部　原口行雄、馮蘊澤
外国語学部　西　紀昭、林 日出男
社会福祉学部　篠崎正美、田中節男
短期大学部　田中　均、藤田誠司
国際交流センター事務室　星子三郎、喜佐田知子

国際交流センター事務室スタッフ

1996年3月まで
室長　星子三郎
室長補佐　西村禮二
喜佐田知子、切通しのぶ、川邊裕佳、園田菜里、野田光、直江美子

1996年4月〜
室長　星子三郎
喜佐田知子、西村明博、切通しのぶ、川邊裕佳、園田菜里、野田光、直江美子

1995年　国際交流EVENTS

月	米国・モンタナ	韓国・大田	中国・深圳	英国・リバプール	独国・ルードビヒスハーフェン
1月	9日　ﾏｲｹﾙ･ｷﾞﾙｶｰｿﾝくん（MSU交換留学生）離熊				
2月	2日　MSU春期短期派遣留学生（2名）出発	4日　第7回大田大学校学生研修団来学（2/7離熊） 25日　洪承囍先生（大田大学校交換教員）離熊 25日　川口圭くん、渡邊潤くん（大田大学校長期交換留学生）出発 27日　木下徹弘先生（大田大学校交換教員）出発	22日　角居典枝さん、佐伯玲奈さん（深圳大学長期交換留学生）出発 25日　脇元由布子さん、溜渕美和さん（深圳大学長期交換留学生）帰国 26日　新立義文先生（深圳大学交換教員）出発		2日　ﾗｲﾝﾗﾝﾄﾞ･ﾌﾟﾌｧﾙﾂ州立経済大学春期短期派遣留学生（4名）出発 15日　ｸﾚﾒﾝｽ･ｼﾞｰｸﾞﾌｧﾝﾂくん、ｼｭﾃﾌｧﾝ･ﾄﾗｲｱｰくん、ｼﾓｰﾈ･ﾄﾑｾﾝさん（ﾗｲﾝﾗﾝﾄﾞ･ﾌﾟﾌｧﾙﾂ州立経済大学短期派遣留学生）離熊
3月	6日　MSU ｸﾘﾌ･ﾓﾝﾃｨﾝ先生来熊（3/11離熊） 24日　モンタナ州政府駐日代表タミー・ラニング氏来学	13日　尹一鉉先生（大田大学校交換教員）来学 20日　辛允貞さん、崔秀芝さん、李銀娥さん、黄淳英さん（大田大学校長期交換留学生）来学	5日　張 蓉霞さん（深圳大学長期交換留学生）離熊 29日　王洋先生（深圳大学交換教員）来学 29日　刘若瑜さん、刘华端さん（深圳大学長期交換留学生）来学	2日　ジョン・コリンズ先生（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学）来熊（～3/4） 27日　フィオナ・ウェルシュさん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学短期派遣留学生）来熊 29日　アンナ・ダネンバーグさん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学短期派遣留学生）来学	4日　グレゴア・シュマルツくん（ﾗｲﾝﾗﾝﾄﾞ･ﾌﾟﾌｧﾙﾂ州立経済大学短期派遣　留学生）離熊
4月	1日　MSU春期短期派遣留学生（2名）帰国 3日　UMﾎﾟｰﾙ･ｽﾌｫｰﾁｪｯｸ先生、ﾃﾘｰ･ｹﾘｰ先生来熊（4/8離熊）			13日　王勇江先生（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学日本語講師）来熊（4/16離熊）	2日　ﾗｲﾝﾗﾝﾄﾞ･ﾌﾟﾌｧﾙﾂ州立経済大学春期短期派遣留学生（4名）帰国
5月	8日　ｷｬﾛﾙ大学ｼｬｰﾘｰ･ﾍﾞｰｶｰ先生来熊（5/11離熊） 16日　モンタナ研修団（15名）来熊（6/5離熊／6/12離日）	25日　貿易学科ゼミ学生研修団来熊（5/27離熊）		28日　上村勝男くん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）帰国	
6月	7日　MSU国際教育局長ﾉｰﾏﾝ･ﾋﾟｰﾀｰｿﾝ氏来熊（6/10離熊）			18日　佐藤誠二くん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）帰国	
7月	5日　ｷｬﾛﾙ大学ﾀﾞﾆｴﾙ･ｼｪｲ神父（ｷｬﾛﾙ大学長期交換留学生）来熊 11日　MSU ｷﾞｬﾗﾃｨﾝ木管五重奏団コンサート開催 14日　ﾘﾁｬｰﾄﾞ･ﾛｯｼｭ先生（MSU交換教員）離熊 14日　ﾊﾟﾄﾘｯｸ･ｷｰﾝくん（ｷｬﾛﾙ大学長期交換留学生）離熊 30日　ﾃﾞｨﾋﾞｯﾄﾞ･ｸﾞﾗﾝﾄくん（MSU長期交換留学生）離熊	3日　学生会幹部来熊（7/8離熊） 10日　第1回大田大学校夏期学生研修団来学（7/29離熊）		28日　サンドラ・ケリー さん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）離熊 11日　ケリー・ウェアリングさん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）離熊	
8月	2日　嶋田有利子さん（ｷｬﾛﾙ大学長期交換留学生）出発 3日　モンタナ州政府駐日代表ﾃｨﾑ･ｸﾙｰｽﾅｰ氏来学 7日　堀正広先生（MSU交換教員）帰国 13日　田島由里さん（ｷｬﾛﾙ大学長期交換留学生）出発 23日　小松真樹さん、田辺順子さん、福田俊寛くん、（MSU長期交換留学生）出発	30日　第5回大田大学校訪問学生研修団出発		フィオナ・ウェルシュさん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学短期派遣留学生）離熊 12日　アンナ・ダネンバーグさん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学短期派遣留学生）離熊 16日　佐藤伸洋くん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）出発 28日　高村諭くん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）出発	
9月	12日　ディビッド・ロビンくん（MSU長期交換留学生）来日 14日　ｹﾙ･ｷﾞﾙﾏｰくん、ｱﾝﾃﾞｨ･ﾍﾙﾄﾎﾞｰｸﾞくん（MSU長期交換留学生）来熊 16日　ｹﾋﾞﾝ･ﾘﾝｹﾞﾝﾌｪﾙﾀｰ先生（MSU交換教員）来熊	5日　第5回大田大学校訪問学生研修団帰国 7日　総長一行来熊（9/10離熊）	7日　王洋先生（深圳大学交換教員）離熊 7日　第1回深圳大学訪問学生研修団出発 14日　第1回深圳大学訪問学生研修団帰国 18日　王方先生（深圳大学交換教員）来熊	14日　ｻﾏﾝｻ･ﾓｰｽﾞさん、ｳﾞｧﾈｯｻ･ｺｸｼｮｰﾙさん（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学長期交換留学生）来学	
10月		28日　大田大学校姉妹提携10周年記念訪問団（学長、国際交流委員長他5名）訪韓（～10/30）			
11月	13日　ﾎﾞｰｽﾞﾏﾝｸﾛﾆｸﾙ新聞記者ﾛﾊﾞｰﾄ･ﾁｪｲﾆｰ氏来学	27日　大田大学校との学生代表相互交流に関する訪問団訪韓（～11/30）			
12月				12日　王勇江先生（ﾘﾊﾞﾌﾟｰﾙ･ｼﾞｮﾝﾓｰｽﾞ大学日本語講師）来学（12/14離熊）	

月	仏　国	教員研修	海外ゼミ研修	その他
1月				
2月			2～ 9日　勝部ゼミ（ﾛﾝﾄﾞﾝ／ﾊﾟﾘ／ﾛｰﾏ） 2～ 9日　田島ゼミ（パリ） 2～ 9日　中野ゼミ（ロンドン／パリ） 2～ 9日　花谷ゼミ（イタリア） 3～ 12日　ルウィンゼミ（ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ/ﾏﾚｰｼｱ） 15～ 21日　杉本ゼミ（ﾊﾜｲ・ｵﾜﾌ島） 16～ 18日　花谷ゼミ（ソウル） 18～ 25日　坂上ゼミ（ﾛﾝﾄﾞﾝ／ﾛｰﾏ） 18～ 25日　安田ゼミ（ﾛﾝﾄﾞﾝ／ﾛｰﾏ） 23～ 27日　蘇ゼミ（北京） 27～3/2日　宇野ゼミ（ソウル）	20日　北京商学院王斌先生来学
3月		4日　小島恒久先生（オランダ／ドイツ／オーストリアへ出張）出発（～4/5）	4～ 7日　宮崎ゼミ（韓国）	
4月				
5月				1日　仏国・ﾄｩｰﾙｰｽﾞ・ﾙ・ﾐﾗｲﾕ大学 ｲｳﾞ・ﾏﾘ・ｱﾘｭｰ先生来学
6月	27日　松岡高広くん（リヨン商科大学長期交換留学生）帰国			1日　カロリーナ・バイエステールさん（米国・テキサス州・サンアントニオ市派遣留学生）帰国
7月	27日　米山悦夫先生（リヨン商科大学）来学	24日　吉田良夫先生（米国・モンタナへ出張）出発（～8/9）		6日　釜山経商専門大学教職員（10名）来学 14日　経済学部「外国事情研修」米国コース出発 17日　経済学部「外国事情研修」韓国コース出発 17日　経済学部「外国事情研修」中国コース出発
8月		21日　米岡ジュリ先生（米国・ハワイ大学短期留学）出発 ※96.3.15に帰国予定。 29日　篠塚敏生先生（独国・ﾏﾙﾃｨﾝﾙﾀｰ・ﾊﾚｰﾋﾞｯﾃﾝﾍﾞﾙｸﾞ大学長期留学） ※96.8.29に帰国予定。 31日　角松正雄先生（ハンガリー／チェコスロバキア／ドイツ／オーストリアへ出張）出発（～9/14）		9日　経済学部「外国事情研修」米国コース帰国 9日　経済学部「外国事情研修」中国コース帰国 12日　経済学部「外国事情研修」韓国コース帰国 17日　六ツ石和歌子さん（熊本市派遣留学生）出発 24日　’95『アジアフォーラムin熊本』参加（～8/26）
9月	10日　上村朋子さん（ポワチエ大学長期派遣留学生）出発			1日　熊本県海外技術研修生刘庆委さん受入れ 14日　ローラ・ガルシアさん（米国・テキサス州・サンアントニオ市派遣留学生）来熊
10月		1日　上村亀美雄先生（台湾・台北へ短期留学）出発 ※96.3.31に帰国予定。 1日　朴宗根先生（韓国・ソウル大学校短期留学）出発 ※96.3.31に帰国予定。	8～15日　大間知ゼミ（リバプール）	16日　城戸麻美さん（熊本市―中国・桂林市派遣留学生）出発 19日　ルイス・アグニィズィJr.氏（米国・ﾃｷｻｽ州・ｻﾝｱﾝﾄﾆｵ市　ｲﾝｶｰﾈｯﾄﾜｰﾄﾞ大学学長）来学 20日　ウズベク共和国・タシケント国立大学（4名）来学
11月				16日　ドイツ連邦議会議員O.G.ラムスドルフ博士講演会 28日　カナダ・マニトバ州立大学（2名）来学
12月			16～25日　杉田ゼミ（ドイツ・ベルリン／チェコ・プラハ） 21～25日　蘇ゼミ（北京）	8日　中国・広西電視台取材

熊本学園大学
KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY
〒862　熊本市大江２丁目5番１号
TEL096(364)5161

国際交流レターvol.18
平成8年7月発行

発行者　熊本学園大学国際交流委員会
熊本市大江2丁目5番1号
電話（096）366-3230
編集委員長　篠崎正美
編集委員　蔡剣波、吉永心一、
堀　正広、星子三郎、
喜佐田知子、園田菜里
企画・制作　株式会社貿易広告社